

---

CRAZYYYY STUUUUNT!!!!

蛇豆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

CRAZY YYY STUUUNNT!!!!

### 【Nコード】

N8929R

### 【作者名】

蛇豆

### 【あらすじ】

ヒロインは変態です。ロリのサブヒロインはヤク中です。でも主人公は普通です。

厨二病殺人鬼少年とアル中アフロオヤジが暴れ回ります。でも主人公は普通です。

第二次世界大戦で狂った傭兵がバーのマスターをします。でも主人公は普通です。

街を治める市長はオタク。そのお供はヤンツンデレ秘書。でも主人公は普通です。

出会う人出逢う人出遭う人誰も彼もみんなキチガイです。でも主人公は普通です。

そんな主人公が彼らの興す宗教戦争に巻き込まれたり、巻き込まれなかったり。

それなのにさっぱり味。カップヌードルシーフード味。殆どコメデーです。

エロい姉ちゃんがお好きな方は是非！！

ホームページ立ち上げました！！

第1話 「死の贖罪はキ ガイの味」 (前書き)

テーマソングはマキシマムザホルモンの

「鬱くしき人々のうた」

## 第1話 「死の贖罪はキ ガイの味」

「皆の者よ。」

美しいゴシック様式のステンドグラスが壁一面に張られたとある教会の中、両腕を大きく広げる大司教に、教会机に並んだ信者達が祈りを捧げる。

「我々は我らが神サルバージによって、強く守られているのだ。」  
サルバージ教大司教、ケビン・チャビスが祭壇の上、胸に手を当てて静かに目を閉じた。それに合わせ、今日のミサに多く集った、白いローブを着た信者達も胸に手を当て目を閉じた。

「ああ、我らが神サルバージよ。」ケビン神父は言った。「汚れし邪教徒共に聖なる鉄槌を」

すると信者達が神父の言葉を繰り返す。

「皆の者よ！」突然、ケビン神父は眼を開き、声を荒げた。「全ての悪に死の鉄槌を！！」

「『全ての悪に死の鉄槌を！！』」教会内に信者達の声がこだまする。

サルバージ教。近年、終末思想の若者を相手にして大きくなった新興宗教団体で、強力な私兵集団を持つ。昨日、隣町の異教教会を焼き払った。中にいた異教徒も残らず皆殺しにした。

神父に天井のステンドグラスからの眩しい日の光が差し込んできた。ステンドグラスには彼らの唯一の神サルバージが異教徒を模した悪魔を串刺しにしている様子が流麗に描かれている。

全ての悪に死の鉄槌を。

やがて、その言葉は神父と信者達との大合唱になった。

全ての悪に死の鉄槌を。

全ての悪に死の鉄槌を。

大聖堂に響きわたる、狂気と狂喜の声。

全ての悪に死の鉄槌を。



次の瞬間突如女が持ったマイクロウージー9mmが火を噴き始めた。

銃口から放たれた無数の弾が信者達を斬り裂いた。ある者は頭部から脳髓を噴き出し、ある者は腕を肩からもぎ取られ、またある者は心臓を撃ち砕かれて床に大量の血糊を吐き出して死ぬ。

「さあて、皆で楽しい悦しい殺し合いをしようじゃないか」女は狂気を臭わせる笑みを浮かべた。

返り血がケビン神父の頬に降りかかった。我を忘れて信者が殺されていく様を見ていた彼は目覚めた。

「皆の者、何をしている！！その売女を殺せ！！」神父が叫ぶと、信者達は一斉に懐から銃を抜き、その引き金を引いた。弾丸の嵐が女を襲う。

女はそれを見ると、先程撃ち殺した信者を立て起こし、盾にした。途端、女の持つ死体から無数の凄まじい衝撃が伝わってきた。

一つ一つの銃弾が死体の肉体を削いでいく。ゼリー状の肉の破片が辺り一帯に飛び散る。

「ヤバいね」女は気なく呟いた。ウージーを死体の首もとから撃つも、弾切れを起こしてしまった。「仕方ない」

ダウト。出番だよ。

女が言ったその瞬間。

突如女の陰からレインコートのようなものを来た少年が、奇声を発しながら飛び上がった。

そのレインコートには女と同じ白と黒のコーティングがなされており、その手にはバットと包丁。フードで隠れた顔に光る眼光は明らかに猛禽のものだった。

「シャハハハハハハハハアア！！」狂った叫び声を上げながら女を飛び越え床に着地するとその少年、ダウトは笑みを浮かべながら銃を撃つ信者達に突っ走っていった。

信者がダウトに照準を変えた。

だが、その時すでに信者の一人が犠牲となっていた。

バットで側頭部を殴られ、力任せに包丁で左胸を抉られた信者は絶望と苦悶の表情で大量の血を撒き散らしながら数秒のたうち回ると、息絶えた。

しかし、その数秒の内にもダウトは2人程の信者の心臓を刈り取っていた。

奇声を上げながら。狂悦の引きつった笑みをこぼしながら。

彼、ダウトは殺人中毒者だ。幼い時両親を殺し、孤児院でクラスメイトを皆殺しにし、裏路地で通りすがった全ての者は無差別に殺し、刑務所でも看守を撲殺して脱獄し、スラムのストリートファイターも皆殺しにし、自分の首を狙うギャングも残らず虐殺した。彼の人生は本当の意味での薔薇色だ。

すると、「バカ、ケツ丸見えだよ」女はダウトに気を取られる信者達に弾を再装填したウージーを撃ち込み始めた。

「クソっ！！」ケビン神父は自分の信者が殺されていく様を見ると、歯ぎしりを立てて司教台を殴りつけた。

このままではまずい。

彼は焦っていた。あの売女とガイキチ男の狙いは私だ、もうすぐ私を殺しに囲みを突き破って来る、と。

だが、恐れてはいなかった。

我がサルバジ教は幾多の戦いを乗り越えて今日のここまで来ているのだ。今までに十を超える宗教を潰し、キリスト教まで相手にした。そんな我々がたつたキチガイ二人に滅ぼされてたまるか。

「うおおおおおおお！！」ケビン神父は怒りに震える指で司教台の中に光る赤いボタンを押した。

すると、祭壇の赤い床から何かが現れた。

74式車載7.62m機関銃だ。巨大な機関銃がその堅牢な姿を露わにしたのだ。

「何やってんの、アイツ?!」それを見た女は一言。神父を撃とうと試みたが、目の前の信者の相手で精一杯だ。

神父が銃の二つあるグリップを握った。不遜な笑い声を上げて。





はずだった。

そして、神父自らが言った「我が身の滅び」の時も案外あっさり来てしまった。

「やあ、御苦労様。」祭壇に奉られたサルバージ神の巨大な彫刻の影から殺した筈のあの女がウージーを持って現れた。

見ると女は上半身は何も着ていない。裸だ。

死体の方をよく見てみると、明らかに他人だ。硝煙の中で女は自分のスーツを信者の死体に着せたのだった。

しばらくすると、教会机の陰に隠れていたダウトも祭壇に上がって来た。女と同じく上半身は裸。

「チエックメイト。アンタ弱いねえ」女が神父の顔を覗き込む。

小さく舌なめずりをして、耳に優しく息を吹きかけた。「代わりにアンタとところのを着たかったんだけどね、面倒臭かった。アンタの機関銃で穴だらけだったしね」

女は司教台に神父を押し倒し、ウージーを額に押しつけ、神父と覆い被さって鼻先が触れ合う程に接近した。と同時に神父の胸に2つの乳房の生暖かい弾力が伝わった。

「本当はアンタと一発やってから殺したかったんだけどね。野次があるし、帰ったらアフロが五月蠅いし」残念、と笑いながら女は引き金を引く人差し指に力を入れ始めた。「何か言い残したい事はある?」

「貴様…貴様の名は…?!」

「…アタシ?…アタシの名前はクロア…。もういいでしょ?死ね」

第2話 「キガイの歌は地獄への入り口」 (前書き)

## 第2話 「キ ガイの歌は地獄への入り口」

僕の名前はブロンズ。今、ロサンゼルス国際空港のタクシー玄關にいる。

ドイツから遙々観光にやってきたのさ。

今から何処に行くのかって？ここから北に30キロほど行ったところに、ロハネっていう町があるんだ。そこにはね、いろんな教会があつていろんな宗教があるんだってさ。

僕は宗教に興味があるんだよ。変だろ？でもね僕はいろんな宗教を学ぶことでのいろんな思想を学べる、と思つてゐるんだ。宗教を学んで世界をもつと知りたい。僕はその為にロハネに行くんだ。

そう言えばさつき飛行機のニュースでロハネでサルバージなんたらつていう宗教団体の教会が爆発したつていうのを聞いたんだけど大丈夫かなあ。

あつ、新しいタクシーが来た。待つてるタクシーが全部予約済みで困つてたところだったんだ。おい、カモン！！僕の前に停車してくれた。乗れた！よかつた！

さて、運転手さんに行き先を言わなきゃ。英語はバッチリだぜ。

「ロハネへ行つて下さい」

よし言えた。レッツゴー・ロハネ！！

…あれ？運転手さん浮かない顔だねどうしたの？

「…ロハネかい、何の用だ？」運転手さんは僕の方を向いて聞いてきた。

「色々な宗教を学びに行くのです。」

「そうかい。」運転手は素っ気なく答えると、「安くしとくから街の前で降りてもらつぞ。」

「あ…はい…分かりました…」何なのだろう。サルバージなんたらの爆破の影響で街には行けなくなつてるのか？そうなつてたら困るなあ…

すると、タクシーは動き出した。ロサンゼルスの田舎育ちの僕には目も眩むような都会の中を走り出した。

運転手さんとのその後のやりとりで基本料金はタダ、距離延長金は5割引になった。やった。

しばらくすると突然、車窓からの風景が高層ビルが立ち並ぶ都会から古風な建築様式の建物がずらりと並んだ歴史感じる町並みへと変わった。

ロハネだ。ここでタクシーが道路の脇でストップした。

「行きすぎた…すまんが、ちゃっちゃと降りてくれ」運転手さんが眉間に皺を寄せた。

「あ…はい」僕は財布を取り出した。

えーと、15ドル25セント…？あつ、小銭で出せそうだぞ…！

1ドル硬貨が1枚…2枚……14枚…15枚…！あつた…！

…あれ？25セント硬貨が…

「ああ、遅い！お客さん、もう金いらなから降りてくれ…！」

突如、運転手さんが声を荒げて言った。

「…は？」

「早く…！」

僕は運転手さんに無理矢理身体を押し出されタクシーから放り出された。歩道に転がる僕。キャリアも乱暴に投げ渡された。直後、タクシーは猛スピードでウターンし、そのまま走り去ってしまった。何だろう…？タクシー禁止区域なのだろうか…？その割には周りには沢山タクシーが並んでるぞ…？

まあ、いいや。タダ乗りさせてもらったし。

今、僕のロハネの旅が始まった。

晩秋の夕方はやっぱ少し寒いな…ジャンパーでも着ようか…。

やっぱいいや、冷えた風が気持ちいい。

僕はキャリーを引きずって歩きだした。

白を基調とした古風な風景はどこかヨーロッパを思わせるような趣があり、所々に目当てとする教会も見える。

どこからかジャズの美しい音色が聞こえる。通り過ぎようとしたバーからだ。僕はそのウィンドウを覗いた。黒のスーツをお洒落に着崩した3人の老人が楽しそうに体を揺らし、ピアノやらドラムやらをリズムカルに叩いている。曲はキャラバン…だろうか。その前では嬉しそうに酔った若い男女の2人組が座っていた。

いいなあ…僕は店内から漏れ出す淡い光に包まれる。

出来る事ならいつまでもここでこうしていたかった。

だけど、先に宿を指さなきや。ほら、日が落ちかけてる。

茜色に染まる町並み…何百年か前のロンドンの街がそのまま時を止めているような風景。

見渡すパノラマ360度全てが芸術。

まるで異世界だ。

さて、もう少しで予約していたホテルに着くぞ。ああ、時差ボケで頭が痛くなってきた。早く行かないと。

街灯がポツポツと点き始めた。辺りもすっかり暗くなってきた。立ち並んだ家々にも明かりが灯される。風も一層冷たくなった。

僕はバックパックからアデイダスのジャンパーを取り出し、着た。正直心地良いけど体には堪える寒さだ。風邪を引いたらコトだ。

すると遙か前方で警察が何やら集っているのがぼんやりと見えた。あれ、そこから黒い煙が出てるぞ。あつ、消防車も来てる。まさか

――？！

僕は走り出した。まさか、ニユースで言ってたサルバージなんたらの教会か？

ドンピシヤリ。僕の予想は当たっていた。息を切らしながら目を向けると、木っ端微塵になった教会の残骸がそこにあった。

ニユースで見たものと同じ光景だ。黒炭にまみれた白の煉瓦。碎け散ったサルバージ像。焼け焦げた死体もまだ何体か転がっている。見回してみると、どうやら周りの建物も教会の爆発に巻き込まれたようだった。

右隣の喫茶店なんかは壁が抉り取られているし、左隣のホテルなんかはほぼ全壊状態だ。酷い有り様だ。

ん…？ホテル…？

そのホテルの外壁に辛うじて引っかかっている、爆発によって大きく傾き歪んだ看板に注目した。

なんてこった。

ホテル・ミスロハネ。

僕が今夜に予約しておいたホテルだ。そのホテルが僕の目の前で、文字通りのスクラップになってしまっている。

流石にこの状態で営業はしてないだろう。だって入り口が潰れちゃってるんだもん。

…どうするんだ。旅前に見たネットによればロハネ市内ではこのホテル・ミスロハネが唯一の宿泊施設らしい。まさかこんな形でフられるとは…

ツイてない……

ロサンゼルスに逆戻り…か…

僕は仕方なくホテルに背を向け、フラフラとトボトボと来た道を戻り始めた。

すると、背後から現れた1人の少女が歩く僕を呼び止めた。

「ねえ、そこのお兄さん」ふと、明瞭で可愛らしい少女の声が背

後から聞こえた。

僕は振り返った。が、すぐには声の主が何処にいるか分からなかった。

彼女が小さすぎたのだ。

ふと足元を見たら彼女はいたのだ。彼女の背丈は僕の腰の高さより低いため、振り返るだけでは彼女の姿は捉えられなかった。

その少女は奇妙な服を着ていた。右半分を白、左半分を黒に染めたパーカーの様なものを着ていた。袖の方は上下に分かれ、右側は上が白、下が黒。左側はそれとは反対になっていた。下には白いスラックスを穿いており、首には十字架の様なものがぶら下がっていた。

「…君はキリシタンかい？」

すると少女はニコリと微笑んで、「そうです。キリスト教エングルス派です。」と背の高いこちらを見上げながら返した。被ったフードから覗いた彼女の目は今の夕日のような金に輝いていた。清潔そうなロングヘアの髪も同じくそうだった。

「お兄さん、何か困った事があるでしょう？」今度は彼女が僕に質問してきた。

「ん…ああ…今晚の宿がオシャカになったんだよ…」僕はすっかり遠ざかってしまった、瓦礫同然となった廃墟を指さした。ああ、教会を爆破した連中が忌々しく思えてきた。

「あっ…！」途端少女は目を丸くさせて、誰もが思いもしない事をサラリと言った。

「すみません。私達の所為です。」

は…？

え…？

僕は驚きを隠せなかった。

「…君があそこを爆破したの…？」



「ええ、そうです。」

「あの教会を？」

「はい、そうです。」

「……。」

「……。」

「お巡りさ〜くん!!!ヘルプミー!!!」

「無駄です。そこら中の警察はみんな私が賄賂で買ってます。」

そう言つて無邪気な笑顔を見せる少女。(賄賂と言っている時点で邪気満々なのだが)

……。

ええええええ!?

閑話休題。

「……… そうですか。宿がなくなつたんですね……。」少女は陰りを見せて俯いた

「……巻き添え喰らわせて本当にどうも済みませんでした……」すると少女は申し訳なさそうにペコリと頭を下げた。途端、妙に甘い香りが舞つた。香水か……? ああ、もうこの子なんか怖い……。

「ああ、もういいよ」僕は笑顔でそう返すと少女に背を向けた。本当に日が暮れてきた。早く街を出て宿を取らなきゃ。そして何よりこの子怖い。「そう言つてホテルの人にもちゃんと謝るところねじゃあね。僕はもう行くよ。新しい宿を探さないとね。」

僕は早足で逃げ……もとい歩き出した。えーと次どこにしようか。

まあ、取りあえずへい、タク……

「あつそうだ!!!お詫びに私の家に泊まりませんか?」振り向くと、少女は嬉しそうに僕の腕をがっしり掴んでいた。

あ、もう駄目だ。僕は思った。

だが、反面嬉しかった。どんな形であっても旅先の情というのはこの上なく嬉しいものだ。

だけど、この子怪しいぞ、怪し過ぎるぞ。どうする……?!

あああああゝゝゝ

僕は2秒葛藤した末、「え、ホントに！？ありがとう！！」少女についていく事にした。

昔から僕、情に弱いんです。

すっかり夜になって少女に連れられた先は何と教会だった。正銘ここが私の家です、と少女は言う。その教会はこの街の他のものより一回り小さかったが、建って間もないからだろうか外装に目立った汚れは一切無い。

「ただいま帰りましたあゝ。」少女はそう言っただ理石の階段を昇って少し進み、大きい大聖堂への扉を叩いた。

すると、銀行の金庫の堅い扉のようにゆっくりとそれは開いた。中へと進む。左右に何十という教会机の列。足元には赤のカーペット。祭壇に奉られているのは十字架に磔にされたキリスト。上を見上げれば美しいステンドグラスが天井一杯に張られている。小さいのに関わらず立派な内装だ。

しかしブロンズがそう思った直後、彼の目に信じられないモノが飛び込んできた。

祭壇の上の司教台で一人の若い女とアフロの中年男性が酒を酌み交わしていた。

思いつ切り罰当たりだ！ブロンズは思った。何故なんだ？普通の教会では飲酒禁止なのにー

「やあ、お帰り教祖様。」酔って少し顔を赤らめた女が、少女に

向かって手を振った……？

…んん？！

えっ…まさかこの子教祖！？キリスト様が教祖じゃないの？って  
いうかまずこの歳で！？もう訳が分からない…

すると、僕は手を振る女と目が合ってしまった。しばらく見つめ  
合つと、

「ねえ、教祖様。その色男<sup>ロズオ</sup>、誰？連れて来たの？」首を傾げて  
聞いた。

「はい、私が連れて来ました者です。今晚ここに泊めてあげる事  
にしました。名は……」

「…僕の名前はブロンズ。ドイツから来たんだ。」教祖…少女…  
？が詰まったので僕が代わりに言った。そういえば僕まだこの子に  
自己紹介してなかったな…。

ふうん…と女は相づちを打つと、手元に置かれた一杯のビールを  
ゆっくりと飲み始めた。

「OK、OK。ブロンズね。あたしの名前はクロア。宜しく」ク  
ロアはそう言うのと司教台の席から立ち、祭壇から降りてきた。

クロア…OK。分かった、クロアね。じゃあクロア、服はまとも  
にしてくれよ。白と黒の袖無しYシャツ…胸のところしかボタンと  
めてないよね。それと、スラックスはちゃんと穿こう。

目のやり場に困るから止めてくれ。

「何ジロジロ見てんのさ？」僕がいろいろ考えているとクロアは  
挑発的な目で聞いてきた。

「え、い、いや……」ああ、ヤバい。完璧にどもってしまった。  
こういうのには免疫が無いんだよなあ。「…べ…別にジロジロなん  
か見てないよ…」

「嘘。ヤベえ、一発ヤリてえ、とか思ってるでしょあんた」  
……。

いきなり何言い出すんだー！？まあ、酔ってる様だから仕方な  
いか。あ、最初の三文字「ヤベえ」は合ってる…。



ことが出来た。「何だよ、アフロインポ！」

「うるせえ、セツ中ビツチ。」そう答えたのはクロアと先程まで飲んでいたへべれけの中年男性だった。クロアと同じ様な白黒スーツを着、同じ様なスラックスを穿いていたが、足首までの丈がある赤いマントと彼自信の顔が三つは余裕で入るだろうと思う巨大なアフロがとても印象的だった。

この人がスリッパを投げて僕を助けてくれたんだね。ありがとう。

「おう、その兄ちゃん。俺アリカルドつつうんだが…面倒臭え、アフロって呼んでくれ。」中年男性…オヤジ…リカルドは僕にそう言くと片手に持ったテキーラの瓶をそのまま滝飲みし始めた。

それにしてもこの人…かなり体臭…いや酒臭い人だなあ…結構離れてると思うのにここまで臭いがやって来るぞ…！

ここで、「あっそうだ！」少女教祖が突然、何か閃いた様に呟いた。

「そろそろ薬を飲まなきゃいけません。」少女はそう続けると懐から白い粉末の入った小さいビニール袋を取り出した。

…あれ？

あの粉…覚醒剤に見えたのって僕だけかな…多分気のせいだ。

少女はその袋から薬（覚醒剤じゃありません）を最寄りの教会机の上に少量こぼすと、それに思い切り鼻を近づけ、大きな深呼吸を繰り返した。

…覚醒剤じゃないよね…？え…？

少女は深呼吸を数回すると、恍惚とした表情でこちらに向き直した。

「はわわわわ、おそらにきんぎよがういてますう〜」

……。

イヤアアアアア！！覚醒剤だあ！！

ああああ。そういえば、夕方のあの匂いって香水じゃなくってこれ！？

世も末だあ。

…あつそつだ。この子名前何て言うんだろつ？

振り返ってみれば、僕、会ってから一度も名前で呼んだことなかった。

でもこれさあ、聞くタイミング相当おかしいよね？殴られないかな…？まあ、いいや。

営業マンみたく、蠅みたく、手をさすりながら僕は聞いた。できるだけ笑顔で。「そういえばさあ…浸ってるトコロ悪いけど…君…名前何て言うの…？」

「え〜？うんこ〜」。

…。

…。

…？

そつか、君の名は「うんこ」か。名付け親の顔が見たいわ！！

「『うんこ』な訳ないでしょ？ヤク中。」本当の意味で夢心地な少女の頭をクロアがグーで殴り付けた。何も入って無さそうな乾いた音が響いた。「『アリス』って言うんだよ。又の名を『ヤク中教祖』。赤ちゃんの時、哺乳瓶の中身が覚醒剤だったらしいよ」笑いながらクロアは続けた。

「あーあと、ダウトっていうサッチユウの奴もいるから」

「サッチユウ？」

「殺人中毒者。今路地裏の掃除に行ってる。」

「……………」

「後であたしも行く。久々に逆死姦しにイって来るよ。」

……………。

ああもう。何っこ？ホントに地球？

キリスト教エングズ派。

現在、信者2人。

キリストの魂が宿ってこの世に生を受けたアリス・キャンバーを  
教祖とする。

教説は只一つ。

「我らが神からの救いのために異教徒を皆殺しにせよ。」

麻薬を多く取り扱い、それにより収入を得、さらに町長に賄賂を  
貢ぎ、この町を牛耳っているという。

そのためこの町の警察は殆ど機能せず、完全に無法地帯となっ  
ている…

と、リカルド神父はウィスキーを飲み干しながら上機嫌に語った。  
クロアは裏路地に行き、アリス教祖は司教台の上で奇妙なダンス  
を踊っている。

気が付くと、月が知らぬ間に高く上がっていた。夜も更けてきた。  
あくびをすると、リカルド神父に空き部屋へと案内された。教会  
兼家らしい。行く廊下の途中でリビングやキッチンらしい部屋が見  
れた。

空き部屋へと案内され、リカルドがおやすみと言って扉を閉める  
と、僕はすぐにその中であつたベッドへダイブした。

ああ、疲れた。

よし。明日すぐここを出よう。

## 第2話 「キ ガイの歌は地獄への入り口」(後書き)

次話からは糞作者の執筆環境のせいで一話一話がかなり短くなっているから。

見易くなったと捉えるか、見にくくなったと捉えるかはアンタに任せる事にするよ。

b  
y

クロア



第3話 「キ ガイには朝も夜もない」 1

ねえ。僕の実家はね、田舎の農家だからさ、鶏の鳴き声が朝の目覚ましの代わりになるんだ。それが農家の習慣だったし、僕の近所も皆そうだった。

それに対して都会は銃声が目覚ましの代わりになるのか。

へえ〜。

……。

うええええん。助けてええええ。

朝っぱらから大聖堂で撃ち合いが始まってるよおおおお。

「この邪教徒共おお！！よくも我々の教会を壊し、我らが教祖を殺したなあああああ！！」そう一斉に叫び散らしながら銃器を乱射しているのはサルバジ教の信者の生き残りだった。このエンズ・クライシスト・チャーチを朝っぱらから襲撃しに来た輩であり、今朝のブロンズの目覚ましになった輩でもある。一同は一気に大聖堂の扉をぶち破り、ウージーやらAKやらを狂ったように撃ちまくっていた。

第3話 「キ ガイには朝も夜もない」 2

見境なく繰り出されていく銃弾は、ステンドグラスを割り、教会机を蜂の巣にしていく。キリストが神々しく描かれた天井のステンドグラスも一気に崩れ落ち、落下したガラス片が豪快な音を立てて粉々に砕け散る。

止まない銃声。止まない破壊音。

ただ、この教会の者で朝からこの最悪の混声合唱を聞かされて黙っている臆病者はいにくブロンズしかない。あとの4人はかなり不機嫌そうに朝のラジオ体操をしにやってきた。

一番手はアリス教祖だ。司教台に弾が打ち込まれると、その陰からヒョコリと現れた。

「おい、そのガキ！！ぶつ殺してやるぜ！！」直後、完全に暴徒化した一人のサルバージ信者が教祖に銃を向けた。

しかし、その信者は教祖の姿を見た途端、凍り付いた。

アリス教祖は、身の丈程あるミニガン（ターミネーターのシユワルツエネツガーが携行していた小型バルカンであり、アメリカ軍のヘリや車装甲としてよく用いられる重火器）を引っ提げていたのだ。

「貴方達い何をしてるんですかああああ！！」その一瞬後、教祖の絶叫と共にミニガンが唸りを上げだした。

第3話 「キ ガイには朝も夜もない」 3 (前書き)

ウォッカ

世界最強の酒

アルコール度数96パーセント

絶対飲むものじゃないよね。

それをクロア姉さんは第2話の11で飲んでました。

絶対吐きます。

よってこの部分をビールと変更させていただきました。

因みに普通ウォッカはカクテルの隠し味に使うらしいよ。

by ブロンス

第3話 「キ ガイには朝も夜もない」 3

100発/1秒の、化物の呻き声のような銃声が異教徒達の肉体を爆散させていく。

「あひやわゝまるで人がゴミの様ですうゝ」

廻る廻る銃口からの火花と人間の肉の花火が爆ぜる。転がった臓物達が僅かに湯気を立たせる。

ここで、

「おいおい、折角の朝酌が台無しじゃあねえか。」アフロのリカルド神父が気だるそうに祭壇の端から現れた。手にはグレネードガン。

「お前等は『朝は一杯のビールから始まる』っていう言葉知らねえのかあああ!??」怒りと酔いで真っ赤になった額に太い血管を浮き上がらせながら神父は撃った。

それとほぼ同時に、群がる異教徒達がグレネードの爆発と共に吹っ飛んだ。

「撃て!! 撃ち殺せ!!」半数が死に、圧倒的に不利になった異教徒共も応戦する。信じるものを奪われた怨というものは怖いものだ。人を狂わせる。

異教徒の畜生共の目を見てみる。ああ、死んだ奴も生きてる奴も皆、悲しみに瞳が灰がかっている。

教祖は口元を僅かに歪ませ、嘲笑した。

「A m e n .」

祭壇のキリスト像の首元が畜生共の銃弾で抉られた。

第3話 「キ ガイには朝も夜もない」 4

何も見えない聞こえない。何も感じることもない。

僕はベッドのシーツにくるまってそうブツクサ何度も呟きながら銃声が聞こえなくなるのを待っていた。

まず、これ宗教団体なの？テロリストとかマフィアとかじゃないよね？自問自答を繰り返す。

あ、僕ってここ、ロハネには観光に来てるんだよね？本当だよね？何で僕がこんな羽目に…

「おはよう、ロメオ」突然クロアが部屋に入り込み、僕のくるまっていたシーツを引つ剥がした。「良い夢見たかい？」

「あ…うん。最悪の目覚めだったけど。あと僕の名前はブロンズだ。」

「わっかつてるよ。」目を見たが、何も分かつちやいないようだった。「まあ、そんなことより…」

「…何？」

「アンタ一年くらい家に帰れないかもよ」

は？

第3話 「キ ガイには朝も夜もない」 5

どういうこと??え?

帰れないって何で?!

驚きの余り、思ったことが全て口に出てしまった。

「そんなに怒鳴りなさんな。まあ、アタシらにとっちや嬉しい話  
なんだけどさ。」

「どういう意味だよ」

「話が長くなるんだけどさ、サルバージ教が今朝滅んだんだよ。  
わかる?さっきの銃声だよ。でね、この街の支配率でウチらの『キ  
リスト教エンス派』がNo.1になった訳だよ。」

成る程。この街の宗教は互いに争ってるって訳ね。それで頂上を  
取った、と。良かったじゃん。でもそれと何が関係あるんだ?

「あつ。アンタの考えた事わかった。何と関係があるんだ、でし  
よ?」

僕は頷いた。

すると、クロアは僕の寝ているベッドに腰掛けた。

「今のアンタ目立ち過ぎてるんだよ」

第3話 「キ ガイには朝も夜もない」 6

嘘だ。

僕が目立つ訳無い。

小中高、万年いじめられ放題で特技がペン回しの僕が目立つ？有り得ない。

「ここがN.O.1になったという事は、アンタはこの街で1〜5番目に偉いっていうことになるじゃん」

「ちよつと待ってよ、僕は君達の仲間じゃ…」

「他から見たら仲間に見えるさ、この教会に入って一晩出てこないととなるとね。」クロアはこちらを向いてニコリと微笑んだ。「アンタ今、外に出たら100%殺されるよ。まあ、アタシもだけど。」

「…誰に…？」

「バカだねえ、アンタ。他の宗教団体の連中さ。この街を牛耳る為に皆必死なんだよ。」

僕呪われてないか？

とびきり強力な黒魔術とかで。

第3話 「キ ガイには朝も夜もない」 7

マルク・チャップマン市長。

この街、ロハネを牛耳るためには彼、市長に貢ぐのが最低条件だ。市長は金が大好きだ。金の亡者だ。いや、金中毒だ。それ程彼は金を心から愛してやまない。

毎日のように豪勢なパーティを開き、いつも贅沢な超高級ブランドに身を包んでいる糞タヌキだが、彼に貢ぐとどうなるか。

1、警察の無力化。

市長という権限を以って、ロハネに警察が干渉できないようにすることが出来る。完全にとまではいれないが、おかげでロハネは無地帯化し、自由に抗争も出来るようになる。

2、擁護。

貢いでくれる者が死ぬという事は、彼の財布が痛むということになる。

今まではサルバージ教が市長に貢いでいたが、クロア達がつい先程その権利を奪ったのだった。

加えて市長はとても人間不信だ。



第3話 「キ ガイには朝も夜もない」 8

彼にとって金を貢がない相手はただの屑なのだ。

世の中、金、金、金。金をくれない奴は信じられない。

つまり、街から誰かが貢がないとロハネは廃都となってしまうのだ。

この賄賂、即ち貢ぎの行為は半ばロハネの文化だ。ロハネは古くから屑が集まり、屑だけが暮らす、屑の街。

よってロハネの住民は彼に感謝せねばならないだろう。彼がいなければ直ちにアメリカ政府が街を弾圧するだろうから。

3、街の存続。

彼に貢ぐ限り、ロハネは存在する。更に言うと、金でロハネは存在しているのだ。

だから、街の住民は宗教を作り、莫大な金を信者から掻き集め、貢ぎの金を作っているのだ。

だが、「街のみんなで力を合わせてお金を集めよう」なんてことはしない。

街で最も力を持った者が全額払う事になっている。

第3話 「キ ガイには朝も夜もない」 9

4、最強の証明。

その方がロクデナシ住民達にとっては面白いし、この街に協力なんて言葉はない。

みんなみんな平和という名の頭のネジがとうの昔に腐ってしまったのだ。

これが、ロハネ。

これが、ロハネの全て。

どこを見てもキチガイしかいない、そんなゴミ、屑、塵、芥の街の全てなのだ。

「まあ、要するにさ、まずアンタは市長に保護してもらわないと外の空気も吸えないワケ。」クロアは立ち上がった、のびをした。

「まあ、その申請はすぐだからさ、心配しなくていいよ」

「ああ、わかった。」

「うん。じゃあね」

そして僕はすっかり鬱っ気になってしまった。

家に帰れなくなった…

ベッドに再び伏した。

登場キ ガイ紹介 クロア(前書き)

ヒャーヒャッヒャッヒャッ。

凄い色ムラ。

ベタ塗り最高ウ!!!

という訳で悲しい糞絵の誕生です。

トホホ……。

登場キ ガイ紹介 クロア

クロア Cloer

年齢 20歳。

血液型 O型

趣味 嫌がらせ、童貞狩り

キリスト教エンス派のひとり。

エモノは二挺のマイクロウジー。

淫乱嬢。S X中毒。

初体験は七歳。

下ネタ担当。

もし姉だつたらまずい人。

「ちよつ、クロ姉！勝手に風呂に入つてくんなああ！！！」

「ちよつ、クロ姉！リビングで堂々AV鑑賞すんなああ！！！」

「ちよつ、クロ姉！俺のベッドの中へ入ってくるなああ！！！！！」

クロ姉「え〜、いいじゃん」

疲れそうだ。

戦闘力

性行テク

羞恥心

読者人気度  
作者寵愛度

キャラクターマソング・High and Mighty  
COL  
Or 「背徳の情熱」

第4話 「ヤケ酒 With キガイ」 1

「おい、ブロンズ。」リカルド神父がブロンズの部屋の戸を叩く。返事がない。もう一度、戸を叩く。返事がない。

……。

居留守使うなボキヤアアアアアア！！！

リカルドはブチギレてそのドアを思いっ切り蹴破った。

蹴破ったドアの先には、やはりブロンズがいた。

いや、寝転がっていた。

いや、転がっていた。

水を失った魚のような目で虚空を見つめ、すっかり魂の抜け殻と化したブロンズがベッドの上に転がっていた。ブロンズはリカルドを見つけるが何の反応も見せなかった。

「おい、ブロンズ。生きてるか？死んでるなら返事しろ」ジョークにも反応しない。

しかし、リカルドがふと耳を澄ますとこんな声が聞こえてきた。

「僕はお家に帰れないんだ…、僕はお家に帰れないんだ…、僕はお家に帰れないんだ…」

ブロンズの経だった。同じ言葉を同じトーンで呪文の如く繰り返していた。

リカルドは思った。

あゝあ。

鬱だ。間違いない、コイツ鬱だ。

よし、こつという時は…

ビールが一番！！

第4話 「ヤケ酒 with キガイ」 2

「んあ…？ふああ…」

大聖堂の教会机で昼寝をしていたクロアは目覚め、ひとつ、欠伸をした。不意にステンドグラスが視界に入った。眩しい日中の日の光が差ししてこない。夜闇がほのかに滲み出ている。どうやら自分は昼寝のつもりが夜まで寝てしまったようだ。

昨日夜遊びし過ぎたかな…まあでも気持ち良かったからいいや。

足音がしたのでふと、祭壇の方に目を向けた。

そこにはダウトが立っていた。殺人鬼の少年だ。

「おはよう、バカ」

「もう夜だよ。それに『バカ』って呼ぶの止めてくれない？」

「うるせえ、バカ。人の前で死体とセックスする奴はバカとしかいいようがねえよ、バカ」

「気持ちいいんだからいいじゃん。そうだからアタシとー」

「ヤンねえよ、バカ」ダウトはそう吐いて、フードを深く被り直した。

「室内にいる時くらいはフード脱ぎなよ」

「うるせえ、バカ。カッコいいじゃんかよ、このバカ」

「うるさい厨二。」

「黙れ、バカ。」

そんな口喧嘩が20分程。

殴り合いに発展して間もなくすると、リカルドが祭壇の脇から現れた。

第4話 「ヤケ酒 with キガイ」 3

「おい二人共々」リカルドが呼んだが二人は全くの上の空。クロアとダウトの喧嘩は続く。

「ちよつと、今顔殴ったでしょアンタ!!この野郎!!」

「黙れバカ、喰らえ、バーニサンダー・ジェノサイド爆裂・雷電殺戮拳!!とあつツツ」

「痛!!また顔殴ったね、厨二!!死ね!!」

「うるせえ、バカ!!俺は17歳だよ!!」

乱闘。罵倒と拳の嵐。本気の殴り合いだった。

リカルドは最初、面白がってそれを見ていたが、時が経つにつれ段々と苛立ちを覚えていった。

体のあちこちがむず痒くなってきた。リカルドの体がアルコールを欲しているのだ。先ほどから10分ほど飲んでいないリカルドにとっては当然の事だった。

あああああああ……!俺あ早くビール飲んでえんだよオ!!

眉間に太い血管を浮き上がらせたリカルドは懐からスリッパを取り出した。





第4話 「ヤケ酒 with キガイ」 5 (前書き)

五月になりました。

GWはどうお過ごしになりますか？

お暇ならば是非ロハネに観光に来て下さい……。

そしてキリスト教エンス派の教徒になって下さい……。

ニヤハハ。

byアリス

第4話 「ヤケ酒 With キガイ」 5

「ああ…そう…。で？」スリッパで出来た額の傷を手で押さえながら、クロアは言った。

「みんなと一緒にやるうや。」

「犯るの！？誰を？アタシを?!」

「誰も輪姦<sup>マコ</sup>すなんて言つてねえよ、ビッチ!!目を輝かすな!!飲むんだよ!!」

「ちえっ」するとクロアはつまらなそうに舌打ちした。「そうだったよ、忘れてたよ。アンタがインポだったこと」

「言ってる。」リカルドは司教台の上の滅茶苦茶に荒らされた酒を片付け始めた。「んな事より手伝え。」

「…はいはい。」

その間、ブロンズはずっと祭壇の隅に転がっていた。

そしてそれに気付かなかったアリスはその顔面を思い切り踏んづけてしまった。

第4話 「ヤケ酒 with キガイ」 6

「え〜皆さん。」リカルドがマイクを指でつついた。直後甲高いやかましい音が鳴り響いた。「え〜今回、ブロンズ君が鬱になつてしまいました。なので歓迎会を兼ねて憂さ晴らしにみんなで飲み会を開きましょう〜!!」

ワイン、ビール、その他様々な酒類で埋め尽くされた司教台。そこに座るのはブロンズ、クロア、アリス、ダウト、リカルドの5人。ブロンズは思った。

ねえ、なんでアリスちゃんが宴の席に出てるの？あと、ダウトも未成年でしょ君たち。

それとあとこんな事してる間あったら早く帰らせてくれよ〜」  
「早速行くぞ。」リカルドは右手にジョッキを持った。「それは乾杯の音頭はブロンズ。頼むぜ。」

「わ…わかったよ…。」渋々、僕もビールを注いだジョッキを手にとった。「え…ええ…と…うん…と…みなさん、ありがとうございます…います…?」

僕は重い腕でジョッキを持ち上げた。

乾杯。

そして、地獄の宴の幕が上がってしまったのだった。



第4話 「ヤケ酒 with キガイ」 8

すると突然、猛烈な異臭が強烈に鼻をついた。そう、ダウトのゲ口だ。

おうつぶ。

まずい、クソっ、貰いゲロしてたまるか！

僕は息を詰め、こみ上げてくる吐き気を必死に堪えた。喉の奥からせり上げてくる得体の知れない化物を懸命に押さえ込む。

が、間に合わなかった犠牲者、約2名。史上最高に気持ち悪い混声二部合唱が聞けた。

「嘔吐のハーモニー」 by リカルド & アリス

二人、特にアリスの具体的な様子は非常に見るに絶え難かったの  
で上手く表現することが出来ないが、とにかく酷かった。

そしてそれにより、悪臭が増した。3倍増した。

目が染みる程の悪臭だ。自然に涙が溢れ出てきた。もう駄目だ。  
死ぬ。

ブロンズは立ち上がると自分の部屋へと風の如く疾走した。

第4話 「ヤケ酒 With キガイ」 9

ねえ、

宴が唾鼻叫喚の地獄絵図に変わるのに5秒と掛からなかったんですけど。

ああ、しんどい。

ブロンズは自分の部屋のドアにもたれ掛かり、誰もいない静かな廊下を見ていた。

肩を上げ下げしてすっかり疲労困憊してしまった肺に空気を送り込むが、まだ微かに酸味のある臭みがある。どうやら毒ガスはここまで浸食しているようだ。

もう早く寝よう。あれのどこが歓迎会なんだか。

僕はドアノブに手を掛け、部屋の中に入った。

入ってからドアを閉めると、あら不思議。あの臭いはどこかへ消えてしまいましたとさ。

めでたし、めでたし。

と、いきたかった。

次は別の臭いが僕の部屋の中を支配していたのだ。

生臭い、いや、こつもちよつと性的な意味で生臭い…単刀直入に言えば、

女の匂い。

「やあ、ブロンズ…」  
どきり。

もう勘弁して、クロア。

第4話 「ヤケ酒 With キガイ」 10

これはまずい。早くここから出ーー

「捕まえた」

いつの間にか手首を掴まれていた。ドアから強引に引き剥がされる僕。

「展開読んで先回りしておいたよ。やっぱりゲロ地獄になったんだねえ」

今度はベッドに突き倒された。

ねえ、クロアさん。クロアさん。何で貴方は全裸なの？  
それはねえ、アンタとエッチするためさあ。

有名なグリム童話をちょっと擦ってみた。じゃあこの後僕食べられるの！？（性的な意味で）

「ここだったらスリッパが邪魔に来ないし二人でゆっくり乳繰り合おうよ」クロアはそう言うのとゆっくり舌なめずりをした。

ヤバイ。

やられる。

今回はスリッパは飛んで来ない。

絶体絶命。断崖絶壁。

……。

僕は諦める事にした。



目を閉じた。暗闇が視界を覆う。

もうヤケだ。何も見えない聞こえない、何も感じるものはない。ここでぼくははいになるのさ、わはははひゃわ。

あれ、なみだがとまらないよ。わひゃわひゃ。

「アハハ、とうとう観念した？」

ズボン、いや、パンツの中に何か入ってきた。ああ、これは手だ。クロアの手。あーもーどーだっていやー。にるなりやくなりどうとでもしろよお〜

あ、なにこのこえ。ろうかのほうからちかづいてくるみよ。

「おるあああああ！！！！ビイイイッチ！！！！フアアアアアツク

！！！！」

あ！！リカルドさんだ！！いや、様だ！！

猛るリカルド様は部屋の扉を蹴ってぶち壊すと、すぐさま僕待望のスリッパ様をぶん投げた。

投げられたスリッパ様はクロアの頭部を見事に捉え、その一撃で彼女を気絶させた。

ありがとう。僕の心は貴方への感謝の気持ちで一杯です。

「ありがとう。リカルド様。」

「気にするな。それと俺のことはアフロと呼んでくれ」

「ありがとう。アフロ様。」

しかし、今気付いた、とんでもない事がひとつ。

第4話 「ヤケ酒 With キガイ」 12

敬愛すべき、信愛すべきアフロ様がなんと身体中ゲロまみれにしておられるではないか。

……。

さあ、みんな!!ここでひとつ、算数の勉強をしよう!!  
まずはこの公式を覚えよう!!

ゲロの臭い+アルコール臭+女臭イコール…

貰いゲロ。

あつ、ヤバ。  
うえっぶ。

ゲロゲロゲロゲレレロレロレロレロオエエロエロエロ……  
「なっ…!?!ブロンズ、大丈夫か!?!……おえっぶ。」  
ゲエロゲロエロゲロ…… (中略)

こうして酒とゲロまみれの僕の歓迎会は口八ネの漆黒の夜闇にて幕を閉じた…。

(それから三日間、僕の部屋はあまりの臭さに使用禁止となっ  
てしまいましたとさ。)

第5話 「キ ガイへの貢ぎ物」 1

口ハネ観光は今日で五日目。本当の今日の今頃は飛行機の中でぐっすり旅の疲れを癒している筈だったのだろうが、それは遠い未来の一年後の話となってしまうた。

さて、今僕の目の前の司教台の上には数え切れないほどの100ドル札が山のように積み重ねられている。

そして僕の隣では、アリスがその100ドル札を少しずつ取って束にしたものをトランクの中に丁寧に敷き詰めていた。

午前9時。リカルドは祭壇の端で朝食ならぬ朝酌を飲んでおり、ダウトはキッチンで愛用の包丁を研いでいるらしい。クロアは朝っぱらから自身の部屋でオカズを食べているらしい。世も末だね。

それにしても今日は眠い。晩秋だというのに今日は何故か異様に暖かい。ステンドグラスから差し込んでくる日差しが祭壇のマリア像を後光の様に輝かしていた。

ただ、僕の眠たさの原因はこれだけではない。暇、というのもあった。

さっき言ったように、ここの教会の人々は一人一人全くライフスタイルが違う。僕と唯一噛み合うのはアリスなのだが、今は黙々と例の札束の詰め込み作業をしている。

第5話 「キ ガイへの貢ぎ物」 1 (後書き)

今回はちよいと真面目に……

カーチエイズとかさせてみましょうか

b  
y  
作者

第5話 「キ ガイへの貢ぎ物」 2 (前書き)

早くも50話目。

記念にキャラ人気投票キャンペーンでもしようかな…？

第5話 「キ ガイへの貢ぎ物」 2

このまま何もしないでいたらまた夢の世界へ逆戻りしてしまいそう  
うだ。

……。

ああ、眠い。

それにしても何なんだろう、このお金。いくらあるんだ？十万…  
いや、もつとあるんじゃない？こんなに沢山、何に使うのだろう…？

「…アリスちゃん」

「なんれすかあ？」

「…口から覚醒ブレスが出てるから後でブレスケア噛んどいて。  
ところで、このお金、何？」

「市長様への貢ぎ物れすう」

「いくら？」

「大体、八十万くらいウエスカー？」

「サンガラスの極悪おじさんになっちゃった！！」もう滑舌が悪  
いというレベルじゃあない。

「まあこれで半月分くらいウエスカーね。あつ、そうだ、今何時  
ウエスカー？」

「九時十二分。つて、いい加減ウエスカーから離れる！！」

「うええええええええ、怒られたあ」

あ、まずい。泣かせてしまった。こういうシチュ苦手なんだよな  
あ。。。。

第5話 「キ ガイへの貢ぎ物」 3

こういう時効果的なのは「居ない居ない婆」なのか（教育テレビでやってた）？！本当によく分かんない！！どうしよう…。

取りあえず、僕は謝ることにしました。

「ごめんね…キツイ事言っちゃって…ウエスカーさんもいい人だもんね…」

変顔したけどやっぱり泣き止んでくれないよ、  
「他界他界」の方がいいのか？

その直後、猛々しい唸り声が僕らがいる祭壇の端から響いてきた。  
「俺のオオ、アリスにイイイイ何て事しやがるんだあアアアアア！！！！」その声の方を向くと、既に視界は目の前まで迫ったスリッパに支配されていた。

贖罪のスリッパは僕の眉間に見事ヒットした。衝撃で脳が揺れる。すると意識が遠ざかり、僕は床に崩れ落ちてしまった。

倒れ際に、クロアが現れてこのロリコンインポと中指を立てたのが見えた。

ああ、そうなの。アフロ様ってロリコンで…イン……

ガクリ。

第5話 「キ ガイへの貢ぎ物」 4 (前書き)

この小説は著作権法により模倣行為の一切を禁止します。  
しかし、同人誌にするのならご自由に





第5話 「キ ガイへの貢ぎ物」 5

僕は後ろを振り向いた。

何と殺し屋みたいな人たちがベンツとかに乗って一杯追っかけてきてるじゃないですか。ウフフフフ。カーチェイスですか。映画か。

「インポ、弾!!」

「ほらよ!!あと、『アフロ』を略すなあああ!!」

「うるさい、アル中!!」クロアは叫びながら、開いた車窓から身乗り出し、リロードしたウージーを連射する。前輪右タイヤを撃ち抜かれた一台の黒ベンツがコントロールを失い、ブロンズ達のバンが通り過ぎ去った花屋の店内に突っ込んでいった。爆音と花屋のおばちゃんの悲鳴、その他諸々の破壊音が一気に交錯した。

だが、まだ十台以上のベンツが漆黒の殺意を身に纏い、追っかけている。

今度は殺し屋達が仕掛けた。黒タキシード黒サングラスの分厚い男達が、窓から上半身を乗り出し、拳銃なり機関銃なりを撃ちまくる。

「糞!!ファック!!」リカルドは男達の狙いを狂わそうと、蛇行運転を試みる。

トランクの扉が、跳弾音で16ビートを刻む。ブロンズが目を見張り、耳を塞ぎ、蛇行運転で体を大きく揺らしながら必死に恐怖に耐えているのが見えた。



第5話 「キ ガイへの貢ぎ物」 7

思い切りブレーキを踏む。しかしT字路の突き当たり、廃教会の壁には、一瞬後には衝突するかしないかの距離。今更踏んだところで意味がない。

ならせめて……

礼拝堂の扉へ突っ込め！！

「うおおおおおお！！」ハンドルを限界まで右に回す。扉は車体からやや右に位置している。届くか……？！「クロア！！ブロンズ！！捕まれ！！」

後輪タイヤが火花を散らし、あっちゃこっちゃ勝手に左右に震える中、前輪が懸命にそれを引っ張る。除々に扉の方へカーブを掛けていくが、途中、前輪の左タイヤも撃ち抜かれた。同時にタイヤの摩擦が十分に働かなくなり、車体はドリフトのような形で扉へと向かう。

果たしてバンは廃教会の扉を突き破り、礼拝堂へ入っていった。衝撃で大きく車体は揺れ、リカルドとクロアは作動したボンネットに身体をピンボールのように弾かれる。一方、トランクのブロンズは一緒に積んであった崩壊したアタッシュケースの山に埋もれてしまった。

それからほどなくして、殺し屋のブラックベンツ達も礼拝堂の中に猛スピードで入り込んできた。

入り込むと、黒ベンツ達は一斉に急ブレーキを掛け、止まってしまったバンを取り囲んだ。

そして、一斉放射。轟音を立て、バンの車体に降り懸かる鉄の雨。サイドミラーもフロントガラスもワイパーも粉々に砕け散り、無数の銃弾が車内を飛び交う。

「ど、ど、ど、どうすんだこれ!!!?」

「アンタが悪いんでしょ!? 何とかしてよ!!!」

リカルド達は各々の座席に伏して、屈み込み、皮一枚のところまで生きていた。

シートは最早穴だらけ。シートを貫通していく銃弾との摩擦熱で開いた穴から焼け焦げた匂いがする。

置いてあったビールの缶も破裂した。中身がリカルドのアフロにぶち撒かれた。

しかし、どうやらブロンズは無事なようだ。アタッシュケースに守られたからか、のびているからかは知らないが、しっかりと生きている。

「クソ、あのデブ市長に会いに行く時はいつもこうだ!!! こんちきしょう!!!」

「叫んでる暇あったらちゃんと運転して!!!」

「畜生、Fuck er!!!」

リカルドはまた叫ぶと、なんと身を屈めたまま、アクセルを入れた。

第5話 「キ ガイへの貢ぎ物」 9

バンが急発進。腐った教会机を蹴散らしながら、粉碎しながら、見境なく一直線に爆進する。

「わあああああああ！ちよつとちよつとちよつと！！」

「ああ、わかつてるさ！！俺様のテクニクを見せてやらあよ！！」

リカルドは屈んだ状態でハンドルを握った。

まだ銃弾の嵐は止んでいない。うっかり顔なんかを出したりするとその瞬間蜂の巣だぜ。

じゃあどうやって運転するかって？まあ、見てなよ！！

リカルドは上を見た。彼の目に映ったのはバックミラー。形は銃弾であらかた筆取り取られてはいたが、彼はそれで十分だった。

スピントーンのような動きで車体が一回転すると、バンはまるで方向を知っているかのように、先ほどの扉まで一直線に走り出した。リカルドはバックミラーの僅かな視界だけで周辺状況を理解し、記憶したのだった。

バンの退場を阻害してくるベントツを、音を頼りに最短ルートで避けまくる。

左、右、も一度左。

ここでリカルドはクロアに合図を送った。

中指を立て、大きく舌を出す。

『爆破』だ。

第5話 「キ ガイへの貢ぎ物」 10 (前書き)

重大なシステムエラーを乗り越え、ようやく復帰致しました。  
よかったですよかったです。

「ああそう」それを見たクロアは自身の座席の側面にある赤いボタンを押した。

すると、唸る車底から大量の、あるものがばら撒かれた。

手榴弾だ。それらは皆、ひとつ残らずピンを抜かれている。

「よっしゃ、全速力だ！！」リカルドはアクセルを思い切り踏んだ。

今ばら撒いた手榴弾は行き付けの発破屋で改造された手榴弾だ。発破屋の主人Mr. J曰く、「こいつを使うんなら逃走車を用意してからにしろ。お前がアロルデイス・チャップマンじゃなかったらな」

バンが教会の外へ出た瞬間、凄まじい轟音と共に光の雨が降り注いだ。太陽の光もあったが、爆発の閃光の方がいっとう眩しかった。爆発は教会中のありとあらゆるものを割り、裂き、砕き、有象無象を片端から消し炭にした。

教会の中で惑っていたベントツ達は一瞬にして木っ端微塵にされ、それらに乗っていた黒服達も痕が無くなる程に焼き尽くされた。



第5話 「キ ガイへの貢ぎ物」 11

「Jの手榴弾は相変わらず凄いね……」

「ああ、アイツはなんでもかんでも容赦ねえからな。持ってたら核も入れかねえぞ」

バンに瓦礫の小粒が雨のように降り懸かる。パラパラと無数の乾いた音が断続的に車内に響く。

「……新車買わねえとな」リカルドは教会の方を振り向いた。堅牢な様子を見せていた教会は跡形もなく崩れ去っていた。「本当にアイツはおっかねえよ……」

「同意。」クロアは補助席のシートに座り直し、不意に窓の外を見た。

高速で流れ行く景色。先程の爆発で目の玉をひんむく<sup>チャップマン</sup>通行人。消防車のサイレンも微かながら聞こえてきた。あとはあの金黒豚のところまでのんびり行くとしようかな。

「さあ、もうちょっとで着くぜ、ビッチ。」リカルドは交差点の信号を止まると、言った。チャップマン市長の所まであと1分も掛からない。リカルドは新たな缶ビールを懐から取り出すと景気良くそれを飲み干した。

その直後遙か後方から、悲鳴とも狂声ともつかぬ叫び声が響いた。非常に聞き取りにくかったが、こう発音したには違いなかった。

ブツイキス!!

第5話 「キ ガイへの貢ぎ物」 11 (後書き)

次回、ついにあの方がお出ましになります!!

第5話 「キ ガイへの貢ぎ物」 12

まさかー！。

クロアは慌ててサイドミラーを覗いた。そこに写っていたのは100メートル先から迫る黒いバン。

「ヤバイよ、インポー！」

「何だ糞ビッチ？！」

「ロッキンポ派の連中がこっち来てるー！」

「何だつて？！」

次の瞬間。対向車線を走っていた一台のエルグランドが大爆発した。

車内に居たのに関わらず、爆発の熱がこちらまで伝わってきた。

間違いない。ヤツだ。

「よし、掴まってるよ、ビッチー！！全速力で逃げるー！！」信号は未だ赤色に光っているが、構ってはいられない。奴、デイビッドから逃げるのが最優先だ。アクセルを思い切り踏み、前に並んだ数台の車を抜かして交差点へ飛び出した。

予想通り、横から来た車に衝突した。凄まじい衝突音が響くと車は勢い良くスピンした。しかし、運が良い事に、丁度360度回ったところでスピンは収まり、バンは再び走り出した。

その際、見てしまった。黒いバンから乗り出した奴の顔を……  
オウム真理教の麻原彰晃を思わせる風貌の三角頭の男が、こちらにガンを飛ばしながらRPGを担いでいる。運転席で奇声を上げているメガネをかけた金髪の太った男は激しいヘッドバンキングを繰り返している。

その男の奇声は通り過ぎていく建造物の窓ガラスを一枚残らず粉砕していく。

別にアタシ達はデイビッドのRPGにおびえてるわけじゃない。あんなのいくらでも避けられる。問題は運転手：マイクの方。あんなの連れて市長の所に行ったらどうなると思う？そう、リビングでのんびんだらりと菓子を食べてる金黒狸が窓ガラスで串刺しさ。

あいつらにはここでオジャンになってもらおうかい。

だけどあいにくアタシのウージの弾は少ない。

てなわけで、ここはヤク中教祖に頼むとしようかな。

「糞インポ、あのヤク中に掛けるから携帯貸して!!」

「俺の可愛いアリスさんにヤク中たあなんだあああ!!」

「はあもう何アンタ?!アフロでアル中でインポでロリコンって?!最低だよ!!」

「守備範囲バリ広(シヨタから死体まで)ビッチに言われたかねえよおおおお」

第5話 「キ ガイへの貢ぎ物」 13 (後書き)

決してデイビッドとマイクはマキシマムザホルモンと関係ありません。

もう一度繰り返します。

関係ありません！！

第5話 「キ ガイへの貢ぎ物」 14

「うるさい、チエリーボーイ!!」

「何だこの……!!」

PLLLLLLLLLLLLL!!! PLLLLLLLLLLLLL!!!

変態女、トリカルドが叫んだところで突如、彼の携帯電話が鳴動した。

口論の発端となったアリスからだった。

電話に出たのはクロア。アフロが出たところで戯れ言しか言わないよ。

「もしもし?アリス?」

「ーなんか今困ってるでひょう?」

「ご名答。アタシら今ロツキンポ派の連中にツケられてんの」

「ーうん、こつから見えてますよ。ヤツら景気良くはしゃいでますねえ、わひゃわひゃ。

「……狙撃できる?」

「ーもちろんですう、十秒とかかりませんよ?」

「じゃあ行きますよ、とくところんあれ」アリスはそう言っ  
て電話を切ると対物用ライフルM82のスコープを覗いた……

バンチエスター大聖堂の瓦屋根の上にアリスはちよこんと座っていた。クロアに敵の監視と狙撃を頼まれていた。

聖堂と黒いバンとの距離はざっと3キロ。途方もない遠距離…と思っただろうが、実は違う。通常のM92は2キロまでが射程なのだが、アリスの持っているそれは改造銃である。3・5キロまで弾は飛んでいく(勿論非合法)。そして、アリスの狙撃のテクニクからしても、3キロは大した事ではないらしい。

しかし、

「あゝ、クジラが空を飛んでいますうゝ」M92のスコープを覗くとすぐに現れた幻覚を追ってしまうアリス。性癖である。「まてまておおきなクジラさん」

乙女のお遊戯タイム。

六秒弱経過。

ここでアリスはようやく自分に任された任務を思いだし、我に返った。

「そうでした、そうでした。敵の排除を頼まれてたんでしたっけ」  
独り言の多い九歳児。端から見ればかなりの「おイタした子」である。

アリスはまず、標的の車を探す。案外簡単に見つかった。猛スピードで突っ走りながらわんさか花火を打ち上げている。

ズームイン。運転手、マイクの頭を狙う。が、照準は車の進行方向の遙か先に定まっていた。弾丸の初速は約400m/s。3キロ先まで届くには8秒弱掛かるとのことだ。つまり、8秒後の状況を予測して照準を定めているのだ。

そして、撃った。

強烈な炸裂音が響き、一発の11mm弾はまわりつく空気を裂きながら超高速で飛んでいった。

炸裂音が暫く反響し、ようやく静まり返ったところで、アリスは再び屋根の上に寝転がって気持ち良さげに寝始めた。



「もつと早く避けられないの?!危なっかしい!だからアンタはインポなんだよ!」

「パンクしてて無理なんだよ!!あと、インポインポ言っな!!俺の読者への好感度が下がる!!」

「なら作者に恨みなよ!」

RPGの怒濤の鉄槌を何とかかわし続けてはいるが、もう危うい。パンクしたきりのタイヤはすっかり歪んでしまい、走行することさえ難しくなっている。

だが、それもあと少しだ。もうすぐ、アリスの狙撃援護が来る筈だ。もう少し。もう少し。あと何秒か、十何秒か。幻覚と遊んでいなければいいが……。

今までアスファルトを砕き続けてきたデイビッドのRPGがここに来て車体を掠めるようになった。

鼓膜が張り裂かんばかりの轟音と共に、右の車窓、ミラーから閃光が放たれた。

次の瞬間、車体のすぐ右隣で起きた爆発によって、バンは大きく揺らいだ。

同時に左右に弾き飛ばされる三人。最初からうなだれ続けて人形のように動かないブロンズの体はさらに崩れたアタツシケースの中に生き埋めになった。クロアは右のヒンジ・ドアに額を大きく打ち失神した。残るはリカルドだが、こちらもドアに頭を打ちつけたが、アフロがクッションになって、ぼよんと跳ね返り、元の位置に戻った。

「ええええええ?!」これには本人もびっくりだ。もう彼にはヘルメットは要らない。

さて、クロアもブロンズもダメになった(ブロンズは元からだが)。残ったのはリカルドだけ。マイクの奇声が徐々に迫ってきている。リカルドは対向車線に車がり出していたのを見て慌ててハンドルを握り直す。

「畜生おおおお!!」

そしてリカルドは思い切りハンドルを切った。目前まで迫っていた対向車はバンのボンネットを掠めて過ぎていき、再び襲来したRPGの弾頭も辛うじて避けた。

その一瞬後、黒バンの前輪左タイヤが瞬く間に弾け飛んだ。アリスが8秒前に放ったM92の11mm弾だ。

第5話 「キ ガイへの貢ぎ物」 19

急にバランスが狂いだした黒バン。マイクが必死に体勢を立て直そうとしたが無駄だった。すぐに車体はスピンし、無抵抗で歩道に乗り上げる。

むりぼー!!!

そんな叫び声が聞こえたとはほぼ同時にバンは住居の壁に突っ込みそのあらかたを破壊すると、一気に炎上し始めた。

「……ふう。。……してやったぜ」その様をスライドガラスを開けて見ていたりカルドは中指を立ててから元に戻った。

「さあて…着くぜ。市長の別荘へ」しかし、誰も何も返事をしてこなかった。気絶している人間が口をきける筈がない。そこで彼はクロアの頬を、おい起きろ、と強く張った。

## 登場キ ガイ紹介 アリス

アリス Alice

年齢 9歳。

身長 ブロンスの腰の高さくらい。

血液型 A型（覚醒時はO型）

趣味 お薬。

日課 お薬。

好物 お薬。

苦手なもの 説教。

エモノは重火器全般。狙撃もやってのける。

キリスト教エンズ派の教祖。ロリコンのリカルドから寵愛を受けている。覚醒剤使用時はロレッツが回らなくなる。

妹にすると家庭が崩壊したりしてしまう。

何万回生き返っても大統領にはならないタイプ。というかならさない。

リカルドのみならず一部の読者に絶大なる人気。

絶対コイツ長生きするだろうね。

1番の幸せ者。

戦闘力

覚醒（剤）

ロレッツ

読者人気度



第6話 「金キ ガイは糞の薫り」 1

「はい、これで八十万。」クロアが指し示したその先には山の様に積まれた大量のアタツシユケースがあった。「これで八十万。ねえ、アンタ聞いている？」

「ああ、聞いているよ。」そう素っ気なく切り返したのは、マルク・ファットマン市長だった。

鼻屑目に見ても小太りとは言えない、丸まると肥え太った黒人の姿がそこにあつた。泡銭で蓄えた腹を見ていると妙に憎らしくなり、蹴ってサッカーボールにしてやりたくなる、そんな厭な男だが、その男は今、応接間に集まった客、ブロンズ達の前で一人テレビにかじりつき、ウイニングイレブンに没頭している。

ああ本当にサッカーボールにしてやりたい… Sっ気もちゃんとあるんだよ、とクロアは心の中で叫んだ。

「行けえ〜ガブロフ、突撃だあ〜」そんなクロアを尻目に市長は続けてプレイに熱中した。必死に自軍のGKを敵陣に走らせている。そして20分後。ようやく市長はテレビの画面から目を背いた。

第6話 「金キ ガイは糞の薫り」 2

「わたしのロシアが…負けた…」当然だ。というかいつまで人を待たせているんだ。

「ハイ、八・十・万！！」額の血管が切れかけているクロアはアタッシュケースをデスクの上に叩きつけた。

「おい、ビッチ。無礼はやめろ、相手はお偉いさんだぞ？」リカルドが制止をするも、効かない。クロアはいきり立ったまま市長を睨み付けている。

それを見た市長は泡銭で汚れた醜い顔に似合わない爽やかな笑顔を返した。「はははは、いいよ。私が悪かった」

その笑顔に拍子抜けしたクロアは思わずとも拳を収めてしまった。「……、で報酬は？」

「ガレージにある装甲車を与えよう。」葉巻をくわえた市長の横に、冷厳さを備えた若い女が現れた。オーバル型のフレームの眼鏡を掛け、金の長髪も後ろで束ねており、着ているスーツには一切の皺が認められない、いかにも厳格そうな女が市長の葉巻に火を点けた。彼女は市長の秘書。名はリコリス・キャンベラー。

「……生意気な愚民ですね、殺してしまいたいでしょうか？」

「リコリス君。君はいささか厳格過ぎるよ」

ここで、リカルドにおぶられたブロンズがようやく目を覚ました。

うん。ここはどこだ？

何か高級そうなお部屋だな…。もしかして着いたのか？

ということは……うわ……この人が市長……？マフィアじゃん。ゴッドファーザーじゃん。

っていうか何この巨大まっくるくる助？ああ、アフロ様のアフロか。

「アフロさん、」

「お、ようやく起きたか。」

「ちょっと頭が痛いけどね」

そうして僕は床に降ろして貰った。床に赤いカーペットが敷かれてある。もっふもふだ。

すると次の瞬間。僕の顔を一発の9mm銃弾が掠めた。チュイン。僕の頬から一滴の血の滴が滴り落ちた。

途端、市長さんの横にいた秘書みたいなお姉さんが僕にブローニング・ハイパワー9mmの銃口を向けたまま叫んだ。

「貴様！！何処から現れた！？スパイか？！スパイなのか？！」

は？



第6話 「金キ ガイは糞の薫り」 4

え？

僕はずっとアフロさんに担いで貰っていましたが…？

「……アンタ、目え悪いの？」クロアは大きなため息をつくど、リコリスの眼鏡を取り上げた。

「な、何をする?!」途端たじろぐリコリス。

クロアはその前で彼女から奪った眼鏡をかけた。

しかし、その直後その眼鏡をかなぐり捨てた。

「つつ……たあああああ!!!目が痛い!!!裂ける!!!染みる!!!度おキツううツ!!!」閃光に灼かれたような強烈な痛みを感じた眼球を押さえつけ、身悶えるクロア。

そして、ふつかふかのカーペットのおかげで奇跡的に無事だった眼鏡をリカルドは拾い上げ、リコリスにそれを手渡した。

「すまんな、馬鹿を連れてきちまって。」

「……いや、いい。」リコリスは素っ気なく答えると、また最近度が合わなくなってしまうたな、とぼそりと呟いた。

「あー、あー、あ……っ……」クロアはようやく目の痛みが収まってきた様子だった。「……ねえ、リコちゃん」

「私の名を子供の玩具みたいに呼ぶな」眼鏡を掛け直しながらそう吐き捨てるリコリス。

「アンタにはアイツが見えないの？」クロアはブロンズを指差した。すると、リコリスはその先をじつと凝視した。目を細めながらどンドンブロンズに近づいていく。眼鏡を掛けているクセして全く眼が見えないらしい。結果としてリコリスがブロンズの顔を視認できたのは彼と1メートル間隔になった時だった。彼女はそこまで詰め寄ると、突如、ブロンズから顔をパイと背けた。

「……失敬。いかにもボンクラみたいな顔をしている貴方がスパイなどしている筈がない。すまない」

「……ち……直球だなあ……」

「じゃあさ、そのアフロはどう見えたよ？」と、クロア。

「ただの大きいブロッコリーかと」しかし眼鏡を拾ってくれた時にはしっかりと見えた、と付け加えてリコリスは市長の横へ戻った。

「さあ諸君、ここからは真面目な話だ」市長はリコリスが戻ったのを確認すると、やや前傾姿勢になって話し始めた。

第6話 「金キ ガイは糞の薫り」 6

「君達の80万ドル×12回払いで一年間町の警察を無力化し、私は君達を擁護する。まさに至れり尽くせりだな。OK?」すると、市長の声色が重厚な響きがあるものへと変わった。

「ああ。OKだ」リカルドは答えた。「……だが、ちよいと高えんじゃねえのか?」

「私も上への賄賂が要るんだよ。地位を上げるためにね。」腕を組んでソファに背もたれた市長。葉巻の濃厚な煙が連なつて蛇のよう揺らいだ。「世の中、何でも金、金、金なんだよ。この世は金があつたら何でも手に入るように出来てあるんだ。一生を木っ端役人で終わらせてたまるか」

と、その時、部屋の隅で暇にしていたブロンズが突如、不審な音を聞きつけた。

砕け散るガラスの音、複数人の乱暴な足音。

これは…何？ああ、あれだ。僕みたいなヘタレが撃ち殺されるパターンだ。

ブロンズがそう思った直後、突如、応接間のドアが蹴破られた。

「Freeeeeee!!!」

そう叫んでマシンガンを構えぞろぞろと現れた数人の男達。黒いタキシードとサングラス。先程の殺し屋の新打ちらしい。

その瞬間、リコリスは動いた。

一瞬後の弾丸の嵐をもともせず、左に飛びながらブローニングハイパワー9mmを連射した。弾丸は入ってきた5人の内の3人の頭蓋を一貫し、赤の花火をぶち撒けさせた。

すると、残った2人の殺し屋は、すぐに後退し、対面した壁に背を押しつけた。

成る程。これで奴の撃つ弾は当たらない、手を延ばせば一方的にこちらが攻撃できる。と彼らは踏んだのだろう。

だが、甘かった。リコリスは既に狩猟用ライフルの引き金に指を掛けていた。

直後、部屋に凄まじい発砲音が響いた。ライフルの弾は殺し屋が隠れている壁を貫通した。もう一発。次はもう1サイドの壁を突き抜けた。

沈黙。

誰もリコリスに銃を向けてくる者はいなくなった。

その沈黙の中を市長の拍手が打ち破った。

「流石、私の秘書だ。何でも仕事が早い」と、市長は嬉しそうに笑みをこぼしながら言った。

「私は貴方の為ならば何でもしますよ市長…」

「リコリス…」

「市長…」

そうして見つめ合う二人。

「リコリス」

「市長」

「リコリス」

「市長」

「リコリス」

「市長」

「いつまでもいつしよにしようね」

「はい いつまでもあなたにお供します」

「Fuuuuccckk!!!」無論、叫んだのはクロア。市長と一緒にルンルのイチャイチャモードのリコリスを一撃で張り倒した。「ああああ、気持ち悪い!!!イチャイチャイチャイチャして!!!この小説はラブコメじゃないの!!!アンタ性格変わってるじゃん!!!」

「何だと貴様、殴りやがって。ラブコメじゃないならラブコメに

すりゃあいいじゃないか  
「死ねえ!!」

第6話 「金キ ガイは糞の薫り」 9

「私のリコリスに何すんだテメー!!」殴られたリコリスを見た市長は激怒して席を立ち上がった。

「アンタらが気持ち悪かったのがいけないんだよ!!」  
間違いない、これは厄介事になる!!

「まあまあまあ、二人とも落ち着いて」と、僕は止めに入ろうとした

その時、

ただいまー、と何処からか中年の女の声が聞こえてきた。

「……あ……。」と市長。呆けた声を口元から漏らした。「私の妻が帰ってきた……。」

「……何かまずい事でもあるの?」クロアが聞きたくなる程、市長は突如として慌て始めた。

「私とリコリスとの関係を知られたらどうする?!!」

まあ、確かに。別荘とはいえ、家に自らの秘書を連れてくる所からおかしい。警護用と言っても不審過ぎる。見つかったらただ事じゃ済まないな。言い逃れは絶対無理だ。

ふとブロンズが思った直後、市長は走り出した。部屋の窓に向かってだ。

「あちよー!!!!」

市長は肥満に似合わない俊足で十分な助走を取ると、一気に飛び上がった。すると、その砲丸のような体駆は、助走の勢いで窓ガラスをぶち破った。

第6話 「金キ ガイは糞の薫り」 10

そして、華麗に地面の芝生に着地すると、華麗に転がり前転を繰り出して華麗に立ち上がると、華麗に振り返った。

「H A I H A I H A I ー！！ 私は仕事に戻る！！ 私の妻が来たら大便しに帰ってきたんだと伝えておいてくれえ！！」そう叫んで驚異の瞬発力で家の敷地を出た市長。それに伴い、リコリスもブロンズ達に少しばかりの饒別の言葉を告げてから

「あちよー！！」

と、窓の外へ飛び出した。

嵐が通り過ぎた……。

そこらに死体が転がっている。壁には銃弾痕。割られた窓ガラス

……  
「……これ……アタシらにどうしろって……？」



第6話 「金キ ガイは糞の薫り」 追記 1

「あー、糞、やっぱアイツ駄目だ」廃車同然になったバンを捨て、市長から貰った装甲車から降りたりカルドは呟いた。「なあ、ビッチ。そう思うだろ？」

「うん、酷い目に遭ったよ。アタシに『私の夫に何したの?!』だつてさ、ホント最悪。何もしてないのに」

「何か浮気癖ついてるよね、あの人」と、ブロンズ。カーチエイスさせられたり撃たれたりと大変な一日でした。

「昔っからさ、あれは。もう治らない。精神病院かどっかに行つて貰わないとな」装甲車の扉を閉め、ガレージのシャッターを閉めるリカルド。彼のアフロを夕日が照らす。

3人はガレージを後にした。庭の芝生を踏み、勝手口の扉を開けると見慣れた教会の廊下が現れた。それを奥まで進むと、お馴染みの大聖堂の祭壇に出た。

夕方になっていた。赤々とした光がこれでもかという程に西のステンドグラスからさんさんと降り注いでいた。

そしてその光の下で、ダウトが虚空に向かって包丁を振り回していた。

リカルドはそれを見ると、懐から携帯電話を取り出した。

「もしもし、警察ですか？」

第6話 「金キ ガイは糞の薫り」 追記 2

「待てえええ!!バロー!!」途端血相を変えて吠えるダウト。「俺はただ敵と闘ってただけだよ、このバカ!!」

「ダウト君。」リカルドは携帯電話をしまつと、黒い笑みを浮かべながらダウトににじり寄つた。「君は何歳でちゆか?」

「……17……」

「だつたら見えない敵と闘うの止めて貰えるかなあ、とつてもイタいんだ。おじさん恥ずかしくなつちゃう」リカルドの右手に握られる凶器。スリツパ。「お前いい歳してジャパニーズアニメの見過ぎなんじゃあああああ!!死ねええええ!!!!」

「ぎゃあああああああ!!ジオ 公国に栄光あれ!!」  
リカルド が あらわれた  
どうする

ダウト の まほうこうげき

ちゆうにびょう の もうそう は きかない!!

リカルド の こうげき

スリツパ

ダウト は しんでしまった!!

第7話 「震えるキ ガイと馬鹿」 1

僕がエンズ・クライスト・チャーチに来てから今日で6日目。あの後の市長の電話の話によれば、僕は世間一般の間では犯罪者扱いされてて、市長がそれを丸くくるめるのにはやはり一年掛かるらしい。はあ。

さあ、もう少しで12月だ。ドイツでは雪ってドカドカ降ってたからな、アメリカではどうなるんだろう？

……。あのね、冬って寒いでしょ？寒いもんでしょ？ならば風邪も流行るといっわけ。

ぶえつきち！！

風邪引いてしまいました。

僕は今大聖堂に居るんだけどね、何故かみんなが居ないの。朝っぱらからみんな何してんだらう？

ぶえつきち！！

あゝだめだ。妙に頭がくらくらする。どうやら熱がありそうだ。

早く自分の部屋に戻らねば。

僕はおぼつかない足取りで大聖堂の祭壇に登り、その端の扉へと向かった。扉を抜けると白を基調とした一本道の長廊下に出た。ここに僕の部屋へのドアがあり、クロア、ダウト、アリス、リカルドの4人の部屋も……ってあれ？

……僕の部屋ってどこだっけ？

第7話 「震えるキ ガイと馬鹿」 2

まずい……、僕の部屋は何処？！

ざっと数えてみても扉は15程ある。この廊下は無駄に長い。

僕の部屋はその真ん中辺りだつて事は分かる。

だが、それから後は忘れてしまった。

そして理不尽なことにここにある扉は全部同じデザインである。

あゝ頭が痛いよおゝ早くベッドで休みたいよおゝ。

僕はとぼとぼと廊下を進んでいき、適当な扉の前で止まると、その扉を開けた。

物置だった。沢山の教典が埃を被ったまま山積みになっていた。はずれ。

次。その右隣の部屋。扉を開く。客室だった。大きい黒いソファーが二つ、アンティークのバロツク様式デスクを挟んで威風堂々と佇んでいた。はずれ。

はい次。また右隣の部屋。だが、今度のその扉からは異様な悪臭が微かに放たれていた。

第7話 「震えるキ ガイと馬鹿」 3

何だこの臭い…鉄…？まあいいや…。

僕はそう思いながら中へ。しかし、それが大きな間違いだった。

「やほーいーいー！」扉を開けた瞬間、包丁を持ったダウトが奇声を上げながら中から飛び出してきた。押し倒される僕。床に頭を打った。痛い。

ダウトは僕の顔をなめ回すように眺めると、かぶりながら言った。

「……………なんだ、ブロンズか。てつきりロシアからのスパイかと」

「……………一体いつの時代の話をしてるんだい？」ていうか人を襲うのは顔を見てからにしようよ。んで、人を襲うのに、やほーいって……………？君何歳？ダウトの体を越して見える、部屋に飾られたフィギュアの数々。この人もうだめだ。

「まあ、いいや。なあ、ブロンズ。今から溝鼠の駆除行くんだけど一緒に行かないか？」

「行きません」

「世界の平和の為に……………」

「なりません」僕がそう切り返していくとダウトは、んじゃまた今度な、と言つて去ってしまった。

第7話 「震えるキ ガイと馬鹿」 4

うん……まあ、ここがダウトの部屋ね。わかった。覚えておこう。  
んじゃ、次行ってみよう。

……。

アルコールの匂い…パス。次。甘ったるい不思議な匂い…パス。  
僕はそんな酒飲みじゃあないし、覚醒剤の常習犯でもない。アフ  
口様の部屋とアリスちゃんの部屋ね。OK。わかり易ッ。

さあ、残るは僕の部屋とクロアの部屋。僕ね、一番入りたくなか  
ったのがクロアの部屋だったの。もうトラウマなの。

不運な事に、扉からは匂いが嗅げないようだ……1/2の確率。

一方は玉手箱、もう一方はパンドラの箱。

僕は左右に並んだ扉の前に立つ。

どうしたんだ、僕。どうして体が震えているんだ？落ち着け。落  
ち着け。冷静になれ。

クロアがそんなに怖いのか？自分の心に問いかける。

はい、怖いです。

うん、自分の心って正直だね……びええええん

第7話 「震えるキ ガイと馬鹿」 5

もうこうなったら自棄だ。

仮に間違った方を選んで、その時はその時だ。

行くぞ！デッドオアライブ！！

ガチャリ。

左の扉を開けた。するとすぐクロアの顔が覗けた。

バタン。

……。

……。

ガンガンガン！！

ひいひいひいひい！！内側から叩かれる扉に必死に体を押しつける

僕。

「ちよっ、アンタ！！アタシの出番、2秒未満で終わらせようとしないでよ！！」

ああ、クソ。パンドラの箱を開けてしまった。デッドの方を引いてしまった。クロアを外に出してはいけない、と僕の生存本能が叫ぶ。

「出番が欲しかったらまず服を着て！頼むから！！」

「これがアタシのアイデンテターなの！！」

「テイテイーだ！！なんだよテテーって？！」

「どつちでもいいじゃん！！とにかく開けて！！いっしょに……」

「断る！！」

第7話 「震えるキ ガイと馬鹿」 6

「開・け・て!!」

「い・や・だ!!」

口論すると次第にクロアの抗反する力が強くなってきた。それでも一応男女の力の差というものもあるもので、僕はまだ平気だ。だがこれじゃあ埒が開かない。

ようし、こうなったら開けてやる。ただし、タダじゃあないぞ。

開けた瞬間、自分の部屋に滑り込んでやる。

よし、まずは……、と僕は扉を背で押したまま、右手で最後に残った部屋、僕の部屋のドアノブに手を延ばした。

……クソ、数センチ足りない。何とか届かないだろうか……?! あらゆる関節を限界まで伸ばし、震える手先でドアノブを掴もうとする。

もっとだ、もっと伸びる筈だ。

アイ アム ア ゴム人間。

アイ アム ア ゴム人間。

アイ アム ア ゴミ人間。

アイ アム ア ゴミ人間……!!

ぶちゅん。

突然僕の上腕二等筋で何かが炸裂した。

ああ、つった。



第7話 「震えるキ ガイと馬鹿」 7

ぎゃあああああ……！！痛い！！『肘の急所をぶちつけてシ  
ビビビ』より痛い！！

うん、わかった。僕はゴム人間ではない。扉に手は届かない。

……もういい、開けてからだ。開けてからダイブしてやる。僕の  
部屋にダイブしてやる。なあに、ピンポンダツシユの応用さ。ピン  
ポンダツシユ+鬼ごっこ+スライディング+……あ、ダメだ、無理  
な気がする。

でも、とにかくやらないと……うふんあはん地獄はもうコリゴリ  
だ。

……よし、行くぞ！！

「うりゃあ！！」僕はかけ声と共に今まで目一杯押していたドア  
を一気に引いた。すると、ラッキーな事にドアにつられて飛び出し  
たクロアが廊下の床に倒れ込んだ（案の定、全裸だった。だけど僕  
はもう逃げるもんねハツハツハア！！）。

それを見た僕はすかさず、足の瞬発力を駆使し、僕の部屋のドア  
ノブへ飛びついた（クロアはその時立ち上がっていた。だけど僕は  
もう逃げるんだもんねハツハツハア！！）。

そして僕は一気にドアノブを回し、一気に扉を引き、一気に部屋  
の中へ滑り込んだ。

「あちよーー！！」

その時、クロアも一緒に中へなだれ込もうとしていた。

何としても彼女は中に入れるなあああ！！

そんな脳の指令に僕の足が応えてくれた。

僕はドアの隙間から体をねじ込んでくるクロアの横腹を、スライディングした体勢から後ろに転がって思い切り蹴った。蹴りが直撃し、廊下へ吹っ飛ばされるクロア。それを確認した僕はすぐさま立ち上がり、ドアに鍵を掛けた。

ふう、やれば人間出来るものである。主人公がヒロインを蹴るのは、このよい子が読む物語としてどうかと思うが、まあ、いいや。

ミッションコンプ。一件落着、さあ、寝よう。

あゝ頭が痛い。スライディングしたから余計だ。ぶえつくしよん。僕はドアから振り返り、とぼとぼとベッドへ向かった。

めでたし、めでたし………？

……ん？！

第7話 「震えるキ ガイと馬鹿」 9

あれ……？

僕のベッドってこんな濡れてたっけ？

ベッドの側のナイトテーブル。ランプは置いてたけどキノコを置いてた記憶はないなあ。

本棚。エロ本は買ったことあるけど本棚全部が埋まるほど買った覚えはない。

ああ何か酸っぱい臭い。酸っぱい臭い。

……。

これクロアの部屋じゃん……（泣）

つまり、僕の部屋にクロアが入ってたってワケ……？

デッド オア アライブじゃなかったんだ。

デッド オア ダイだったんだ。

ぶえつきち。ずるずる。ぶえつきち。

「どう？アタシの部屋？気に入った？」全裸のクロアが施錠を解除して部屋の中に入ってきた。

もう色々言いたいけど、風邪で全部言う気力がないから一言でまとめね。

この変態……！

## 第8話 「キ ガイミリタリー始動」 1

『口ハネの死神』、『血の芝狩り機』、『溝の守人』

これらは全てダウトの異名である。彼は、狩られる側の住人達にそう呼ばれ、恐れられているのだ。しかし、これらは全て彼自身が作った二つ名であり、本人の一番は『血の芝狩り機』らしい。

ダウトは、エンズ・クライスト・チャーチから出て、真つ直ぐ100メートル歩いた所にある裏路地スラムを拠点に、毎日殺戮活動を行っている。主なターゲットは麻薬の密売人だ。彼らはその裏路地を中心に商売をやっているので、ダウトは世界平和の為と称し、毎日毎日バットと包丁を引っ提げて彼らを殺りに行っているのだ。

同時に、それがエンズ派の収入源でもある。ダウトは「殺し」に往くと大体、殺した密売人の麻薬を奪い、教会へ持って帰る。それを教祖のアリスが売り捌いて金にする。ダウトの、教会に対する寄付金という事だ。因みにエンズ派のもう一人の信者、クロアは娼婦つまり水商売で得た金を教会に捧げている。

そして、ブロンズがクロアに襲われている間、ダウトは独り、裏路地で猟を行っていた。

第8話 「キ ガイミリタリー始動」 2 (前書き)

最近小説とかのタイトルに「!」マークをつける物が目立ちますよね。

つける意味が解りません。

因みにこの小説のタイトルにある「!!!!!」にはちゃんと意味があります。

皆さんに叫んで貰いたいのです。声枯れるまで。命尽きるまで。

てゅーか叫んで生きて下さい。(最早意味不)

日本よ、バカになれ!!

byアリス

第8話 「キ ガイミリタリー始動」 2

「さあてと……今日はどんな鼠が出てくるかなつと……」

薄汚い裏路地を適当に徘徊するダウト。その脇で彼をおびえた目で見るストリートチルドレンがいた。ダウトはそういった乞食の連中もターゲットに入っではいるが、その輩を殺すのは決まって彼が相当に退屈した時だけだ。

殆ど抵抗のない人間を殺したところで何が悦しい、何が面白い？  
活きた人間じゃなきゃ殺り甲斐がない。

……おつと……！

曲がり角に入った。その時、曲がった先に人が見えた。慌てて引っ込むダウト。

「獲物発見、エイムモードに入ります……」ぼやきながら、そろりと顔を出して獲物の様子を見る。

派手なスーツを着、鼻ピアスを付けた巨体の青年。どこかのマフイアだろうか？まあいい。すると、その青年はひとしきり周りの様子を伺うと、対持していた小汚いランニングシャツの老人に、ビニール袋を一包み渡した。

そのビニール袋の中身には少量の白い粉。それは言うまでもなく、覚醒剤だ。

第8話 「キ ガイミリタリー始動」 3

老人はそのビニール袋を手渡されると、すぐさま小走りで向こうに去っていった。

これは決まりだ。殺してしまえ。ダウトは包丁を握りしめ、一歩出た。青年は突然に現れたダウトの姿を見て素早く身構えた。腰のホルダーにゆっくりと手を近づける。

「溝鼠」ダウトは言った。「お前みたいな奴が居るから世界は狂っているんだ」

「誰だ手前エ？」

「『血の芝狩り機』、ダウトだ。この街でそんな事も知らないなんて奴は相当のモグリだぜ」接近するダウト。両者間の距離が徐々に狭まっていく。

「『血の芝狩り機』やら何だか知らねえが来いよ、来て見ろよ。」中指を立てて挑発する青年。ホルダーから銃を抜き出したのだった。勝者の笑みを浮かべて銃口を突きつける。

第8話 「キ ガイミリタリー始動」 4

が、突きつけた瞬間には最早ダウトの姿はそこにはなかった。一瞬で消えた敵。姿を求めて見回す青年。

すると、ダウトは青年のすぐ下に居た。一瞬で相手の懐に潜り込んだのだ。

「遅えよ！！」ダウトは叫ぶと右手に持ったバットを振り上げた。青年の手から弾き飛ばされる拳銃。拳銃は回転し、宙を舞うとダウトの後ろに落ちた。叩かれた青年の手は複雑に歪み、折れ曲がり、皮膚を突き出した小さな骨からは心臓の鼓動に合わせて血が噴き出される。

「ひいいひいいひいいひ！！」激痛と恐怖で頭を溶かされた青年は悲鳴を上げながら一目散に逃げ出した。激痛に激しく肩を上下させ、瞳を恐怖の色で染め尽くしながら、敗走した。

だが、それもすぐに止まった。

青年のこめかみに包丁の切っ先が湿潤な音を立てて挿入れられたのだ。絶息。

「遅えつつてんだろ？このバカ」青年の背後でせせら笑うダウト。包丁が皮膚に埋もれていく。大量の血の滴が垂れ流れ出した。深部へ突っ込まれる程に、青年の意識は掠れ、薄れ、消えて無くなった。刃が骨を削る。脳髓を貫いていく。



第8話 「キ ガイミリタリー始動」 5 (前書き)

七月になりました。

もういくつ寝るとお正月？

b y 作者

第8話 「キ ガイミリタリー始動」 5

その感触が指に伝わってくるとダウトは、ただ刺すだけじゃつまらなくなってきたのか、今度は乱暴に青年の頭の中を突きまくり始めた。

青年は既に息絶えていたが、包丁で刺突される毎に脊髄反射で体は震動し、空っぽの肺から絞り出された、膈肭臍のような喘ぎ声も偶に聞こえた。接合部からは赤い蜜が溢れだし、ピストン運動を繰り返す包丁には粘ついた脳汁が絡みつく。

「カハハハハハ、勃起モンだぜ。違う意味でスカルフアックだ」更に往復が激しくなる。滅茶苦茶に掻き回される脳髓。大きくグラインド。頭蓋の中で脳が丸ごと一回転した。接合部から脳の一部がはみ出してきた。

それを確認したダウトは一気に包丁を引き抜いた。すると、青年の死体は崩れ落ち、穴の開いた頭蓋から泡を立てた脳汁や血液が、脳味噌の断片達と共に溢れ出した。世にも奇妙なミックスジュースが出来た。包丁にまとわりついた脳汁が糸を引いた。

はは、いい気分だ。こういうのを死姦って言うんだよ。

ダウトは独り言を呟くと、血がこびりついた青年のジャンパーをまさぐり始めた。

第8話 「キ ガイミリタリー始動」 6

案の定、白い粉が入った小袋が大量に見つかった。さらに、名前を書いたリストも出てきた。今日のノルマ、と題に書かれてあり、渡した人のチエックを行っていたようだった。未チエックの欄が数カ所開いていた。あの後、他の人間にも売るつもりだったのだろう。

ケツ、売国奴が。

ダウトは舌打ちをすると、その紙を丸め、適当に投げ捨てた。その後、一緒に出てきた覚醒剤の小包を自分のスラックスのポケットに詰めた。

さあ、仕事は終わった。次は何をしようか。何をして遊ぼうか。死体をバラすのも面白いけれど、やっぱり活きのいい人間を捌く方が楽しい。

ダウトは血溜まりから血を掬い、飲んだ。口の中に鉄の味が広がった。

とその時、路地裏に入ってくる黒い人影が。

第8話 「キ ガイミリタリー始動」 7

その人影は急ぎ足でまっすぐこちらへ駆けてきた。殺した奴の仲間かもしれない。ダウトは身構えた。

距離が近づくにつれ、輪郭が露わになってくる。

金髪金目の男だった。歳は30代そこらだろうか。男は筋骨隆々とした体躯から威厳を放ち、威風堂々とした歩みでこちらに近づいていた。手には拳銃。かなり使われたような、年季の入った銃だった。

マフィアか？宗教団体の輩か？それとも……？

ダウトが憶測をしていると、突然、男が口を開いた。

「そいつはお前が殺したのか？」格調高い声だった。それであつて、ただならぬ覇気を感じさせる声でもあつた。

……こいつ、ただモンじゃねえな……

ダウトが一步後ずさると、男が一步にじり寄る。重圧を掛ける。殺気を感じるダウト。冷厳な目で見下す男。

ああ、いいさ。

そんなに殺りたいんなら、殺ろつぜ。殺し合いだ。

身長差はかなりある。ダウトは170程あるが、男の方は裕にそれを越して2メートルもある様だった。体重にもかなりの差があるだろう。

だが、ダウトは構わなかった。体を前傾させると、真っ直ぐ男に突っ込んでいった。

それに反応した男はバックステップして、銃を撃った。

が、撃った先にダウトの姿はない。

男の横に回り込んでいた。

「遅えんだつての」

男の後頭部を目掛け、バットを振るう。

だが、それは空を切った。

次の瞬間、ダウトの横っ腹に男の渾身のリバーブローが突き刺さった。

顔を歪めて苦悶するダウト。その顔に回し蹴りが入った。

吹っ飛ばされた先にはボロボロのごみ箱。巻き込んで倒す。ぶち撒かれる中身。大量の腐った生ゴミと共に大所帯のゴキブリが溢れ出た。

「誰が遅いと？それはお前の事じゃないのか？」

第8話 「キ ガイミリタリー始動」 9

鼻をつくような異臭が立ちこめる。ゴキブリは壁伝いに這って逃げた。

「……この野郎……マジで殺す……」ダウトの臓腑の底で殺意という名の憎しみが蠢く。

それを見た男は再び銃を突きつけた。身を擦るダウト。放たれた弾丸は体を皮一枚で掠めていった。

その間に包丁で突く。だがそれも避けられた。

逆に再び放たれた弾丸に脇腹を持っていかれた。

焼かれるような鋭い痛みがダウトはたじろいだ。

次の瞬間、もう一つ痛みが走った。

肩にバタフライナイフがいつの間にか突き刺さっていた。

それとほぼ同時に顔に蹴りが入られ、一気に押し退けられた。

よろめくダウト。

今度は自分の血の味が口の中に広がった。深々と突き刺さったバタフライナイフ。シャツが紅に染まっていく。銃創からも止めどなく血が溢れ出す。

第8話 「キ ガイミリタリー始動」 10

「糞垂れが……！」唇から血が零れた。痛みで無意識に息が荒ぐ。「何で手前えここに来たんだ？！何で俺を殺しに来たんだ？！」  
ダウトの息切れ切れの怒号に、男は恐ろしく冷静に答えた。「お前がそいつを殺したからだ」ダウトが殺した、死体になった青年を指さした。

「手前エ……！！マフィアか何かか？！」

「いや、違う」

「んじゃ、やるクチか……？！」

「まあ、そうだな」男が素っ気無く答えた直後だった。

突然、血相を変えたダウトが鬼のように吠え、包丁を男に投げつけた。青年の血を吸った包丁は真っ赤な軌道を描いて男の顔面に向けて真っ直ぐ飛んでいく。

第8話 「キ ガイミリタリー始動」 11

だが、それはすぐに跳ね返された。男は銃底で包丁を叩き落とし、包丁が地面で鋭い音を立てて跳ね返る。

「足掻くな」

男がそう言うて正面に向き直ると血塗れのダウトがこちらに飛び掛かってきていた。冷静沈着にその頭蓋に銃の照準を合わせる……が、出来ない。

腕が上がらない。

何故だ？

自問自答する、男。

腕が上がらないどころか足も動かなくなっている。

一体全体これは何故？

……胸に何か刺さっている……

ああ……俺のバタフライナイフだ……！！

「お返した、バカ野郎」ダウトは笑ってバットを振りかぶった。



ダウトは包丁を投げた後、間髪入れずに自分の肩に刺さったナイフを引き抜き、投げたのだった。投げたナイフは見事に心臓を貫いていた。

次の瞬間、鈍い音が響くと共に男の意識がブツリと途絶えた。男の額にダウトの振り降ろしたバットが直撃したのだ。

頭蓋がひび割れる音がした。出来た裂傷から血が奔流のように流れ出す。

意識を失った男はぎくしゃくに体を折り畳ませて倒れた。

そして、ダウトは安手の人形みたくなったその男を何度も何度もバットで撲打した。

バットが形を歪ませるまで何度も何度も殴り付けた。

やがて、男の頭は割られた西瓜みたくなった。原形を止めていない頭蓋の残骸に早くも蠅が集まりだした。

「…ハア……ハア……ふざけ……やがって……！！糞の分際で糞生意気な……！！」

激しい殴打を繰り返し返し、歪んでしまったバットを放り投げた。流石のダウトも、出血によってかなり消耗していた。

千鳥足になりながらも、立ち上がる。体がふらつく。血を失い過ぎた……。

畜生。この野郎……。

その時、ダウトの脳裏である一つの疑問が思い浮かんだ。

――果たしてこいつは一体何者だったんだ？

ダウトはしよっちゅう戦闘中に怪我をするが、一人の人間にここまで追い詰められたのは初めてだった。

自分を半殺しにした、男の素性を知りたいのだ。

だが、どうやって知るのだ？

死体となった男はもう口を利けない。

ダウトは男の死体の衣服を漁り始めた。

だが、何もなかった。運転免許、携帯電話、その他一切の物を男は所持していなかった。

残るは胸に刺さったバタフライ・ナイフ。この街ではどこにでも売っている、ごく一般のものだった。当然、それだけでは何も情報は得られない。

財布とナイフ。所持品はこれだけだった。

……いや、もうひとつある……。  
銃だ。

……。

ああ、何故こんな簡単な物にさっさと気付かなかったのだろうか……。

死体に握られていたその銃は紛れのない、軍用ピストルだった。

第8話 「キ ガイミリタリー始動」 ブロンズvsクロア（前書き）

さあ、第七話、あの後何があったのか……？  
今、謎が解き明かされる！！



「デイルドー」って奴じゃ……。

……。

はずかぴー……！

第9話 「入院するキ ガイと溜まるリビドー」 1

「だアから、この街に軍が来てるんだっつーの！！このバカ！！」  
完治するまでの2週間、街の中央に位置する聖口ハネ・ブリッツ  
病院という病院に閉じこめられる羽目になったダウト。動けない鬱  
憤で声が荒く。見舞いにはブロンズとクロアが来ている。もうすぐ  
昼時なのに、リカルドとアリスは帰って来ないどころか連絡も取れ  
ない。一体どうしたのだろうか？

「だあーからわかつてるよ厨二。傷口開くよ？」と、クロア。  
病室は個室になっていた。横たわって点滴を打つダウトのベッド  
をクロアとブロンズが挟んでいた。

「るせええ、バカ！！痛っ！っっ！！」

「ホラ、言わんこつちやない……」クロアが溜息をつく。「早く  
動けるようになりたいんだったら静かにしないと……で、何？」

「このバカ、何回言わせんだよ……、クソ軍人が俺を襲ってきた  
んだっての……。」眉間に皺を寄せる。「有り得ねーかも知れねー  
が、ガチだ。」

「……確かに有り得ないねえ……」

その時、「え、それどういう意味？」とブロンズ。街に関しては  
全くの門外漢である彼は、ダウトとクロア、二人の会話の意味がさ  
っぱり解らなかった。

第9話 「入院するキ ガイと溜まるリビング」 2

「…まあ、あれだ」とすると、ダウトが説明を始めた。「この街には軍人は入れねえようになってんだよ。あの糞豚野郎のお陰でな。」

糞豚野郎……市長さんの事か。

「それなのに、そいつが狩場に現れて俺をこんなザマにしゃがったんだよ」

「違反したとかじゃないの？」ブロンズは聞いた。

「いや、違うと思う。糞豚の賄賂の力っていうのはハンパじゃねえからな……」

「何でだろうねえ……」首を傾げるクロア。「……もしかして元軍人だとか……？」

「そうですね、やっぱりあなたは勘が良いですね」突如、可愛らしい少女の声が聞こえた。皆、声のした方へ注目する。

いつの間にか病室のドアが開いていた。その下にアリスが立っていた。

「どうやらその人イラク戦争の一部隊の人のようです」



第9話 「入院するキ ガイと溜まるリビドー」 3

「ア、アリスちゃん!!」と、ブロンズ。「今までどこ行っていたの？ 僕心配だったんだよ……」

「先程言ってた連中を潰して参りました、サー!!」

は……？

「一個小隊を皆殺しにして参りました、サー!!」

「キヤー!!」

「アサルトで全員銃殺して参りました、サー!!」

「キヤー!!」

「ごめん。僕うるさかったね。ホントごめんね。お詫びに後の話の事も含めて今の話を要約するよ。大体に。」

今日の朝四時に起きたアリスちゃんはあらかじめ前日に探しておいた敵と、今までずっと戦っていたんだってさ。その時一緒に戦ってたアフロ様は未だに戦闘中とのこと……。

そしてその敵というのが元軍人の人達であって、イラク戦争の時の遊撃部隊だったとか……。

第9話 「入院するキ ガイと溜まるリビドー」 4

その遊撃部隊は「死神の機雷」と称され、数々の激戦地に赴いて  
沢山の戦果をあげていたそう。ただ、その部隊には裏があつて、  
兵の全員が覚醒剤の常習犯らしいんだ。どうやらその部隊のリーダ  
ーが、任務に大量の覚醒剤を持って行って、部下に振る舞つてたら  
しい。そのリーダーの名前はハウエル。元大尉だった。

あー、しゃべりすぎて舌が乾いた……。

僕の解説はここまで！

「つまり……」クロアは神妙な顔をして言った。「ヤク中のそい  
つらはアタシらの商品を奪おうとして街に来たつていう事だよな？」

「まあ、そういうことですね」と、アリス。「でも百戦錬磨のダ  
ウトさんでさえこのザマです。警戒しないと。」

「うっせえ、ザマ言うな。バカ。アサルトで遠くからチマチマ撃  
つような奴に格闘戦のスリルがわかんのか？楽しいぜえ?!」

するとアリスはにこりと満面の笑みを浮かべた。「解らないし、  
解りたくもないです」

「あー、しんど。」ここで、リカルドが部屋に入ってきた。ドアをガラガラと開けると、フラフラと千鳥足で空いた椅子を探し、よっこらせと座った。「アイツら、マジでヤバかった……アフロがなかったら死んでたぜ……」

リカルドのアフロは防弾製になっているらしい。

「つーわけでお前等。次アイツ等と戦う時や必ずアフロを装着しろ」

「……は？」「……偶然にもブロンズ、クロア、ダウト、アリスの四人の声が重なった。」

閑話休題。

「さて、どうやってアイツ等ぶち殺すよ？」クロアの言葉でようやく話が本題へ進む。

「まあ、あれですね。正面から叩き潰すのは相当骨が折れますね」

「面倒臭え、皆で包丁とバット持って突っ込……」

「黙れ、ボケナス。」と、リカルド。「瞬殺で蜂の巣にされてえのか？せめてアフロは装着し……」

「アフロネタはもういいです」

第9話 「入院するキ ガイと溜まるリビドー」 6

「というか白兵戦は論外です。自殺行為です。あーお薬飲みた……」  
「止めて、アリスちゃん。」ブロンズが割って入った。「病院の人が困るよ?ところでさ、なんで格闘はダメなの?」

「……相手は『元』がついても一応軍隊。格闘術はみっちりやっ  
てた筈だつて事。」ブロンズの問いにはアリスの代わりにクロアが  
答えた。「だから普通の格闘は通用しないと思っておいた方がいい  
ね」

「そうなんだ……」

「まあ、俺は勝ったけど」と、ダウト。ムカつく程のどや顔で。

「アンタ、ズタボロじゃないのさ」

「うつせえ、バカ」

「黙つてよ、厨二」

「はい、おまえ等スリッパ投げるぞ?」

リカルドがスリッパを構えると場の空気が一気に静まり返った。

第9話 「入院するキ ガイと溜まるリビドー」 7

ダウトとクロアの表情が凍り付いた中、リカルドは続けた。「とりあえず、だ。多分ハウエルの野郎はまだまだ兵を持っていると思う。射撃で一人ずつシラミ潰しに殺っていくのも手だが、時間がかかる……。そこでどうだ」

「Mr・Jに協力して貰わねえか？」

「きつと最高のパーティになると思うぜ？」

発破屋Mr・J。依頼者が持つてきた爆弾を二ト口等で違法改造する、エンズ派行き付けの改造屋である。手榴弾から地雷、さらにはロケット砲の弾頭なども改造対象として取り扱っている。因みに店主であるMr・Jの本当の名は彼の肉親が親しい縁の者にしか分からない。無論、エンズ派の者は皆、彼の名の一切を知らない。

第9話 「入院するキ ガイと溜まるリピドー」 番外

四人がMr・Jの元へ向かい、一人病室に取り残されたダウト。途端空気が静まり返る。

ダウトは退屈である。

大好きな包丁を研ぐことも出来なければ、幻想と戦うことも叶わない。

ああ、暇だ。

ああ、暇だ。

何か面白いことねえかな、と何の気無しに辺りを見回してみる。

すると、クロアが座っていた丸椅子の上に何やら赤いリボンと白い紙で梱包された箱が……。

ああ……見舞いね。

アイツいいところあんじゃねえか……。

早速その箱を手に取り、梱包を乱暴に引き剥がす。

果たして箱から出てきたのは、一、二、三冊の本だった。

――成る程。これで暇を潰せと。

よし、じゃあ最初何から読むか……。

えーと。

「スカトロ専！！ 脱糞編」

「マダムのひとりアソビ」

「SM調教 生ハメ拷問」

……。

……あの変態いいいい！！

しかもよりにもよって全部アブノーマル系！？

ちよっただけ覗く。

悶絶。

嘔吐。

こうしてクロアの見舞いは17歳のダウトに強烈なトラウマを植え付けたのだった……。

第10話 「タバコキ ガイは爆弾狂」 1

ねえ、これ留守かなあ？

僕たち今Mr・Jさんの店の前に来てるんだけどさ。

いくらノックをしても、いくらチャイムを押しても、いくら叫んでも、店の扉が開かないんだよ……。

10分も粘っているんだけどね、店主のMr・Jさんが全く姿を見せないの。

「……クソ、J、J、J、Mr・J！」リカルドが叫びながらチャイムのボタンを高速連打する。しかし時間が経つにつれて、段々と連打が遅くなり、声も小さくなっていく。「じえい、じえい、ゼー、ゼー、こ、交代だビッチ……」息切れ切れのリカルドが扉から離れ、クロアに催促をかける。

「え、面倒くさ……」眉を顰め、嫌がるクロア。面倒な事は嫌いなのだ。「ヤク中、お願い」

クロアはアリスの方を向いた。すると、

「ほえ、なんれすかあ、はわわわ」千鳥足のアリスがごみ箱を頭に被り、あさつての方向に向かってヨタヨタ歩いていた。

「……アンタ、いつの間に吸ったの……？」

「うにゃあ、ごみ箱に理想卿ですう」

「もうアンタ、ダメだよ……ごみ箱が理想卿って……ゴキブリかい」





第10話 「タバコキ ガイは爆弾狂」 3

僕が扉を開けた瞬間、

「馬鹿、開けるなア!!」

とアフロ様の声が。

「タバコの煙を吸ったら死ぬぞオ!!」

え?ちよつと何ソレ?

直後、店の中から出てきた大量の黒煙が2mを越える巨大な塊となつて僕を襲つた。

え?これタバコの煙?このドス黒いの?これ避けると?

……無理でえす。

遅かつた。気付いた時既に僕は息を吸ってしまっていた。その黒煙を吸ってしまったていた。

……。

あれ?何だろう?とつても気分が悪い……

ぐはっ(吐血)。

バタリ。

ゲロゲロ(嘔吐)。

ん?今思い出したけどさあ……

僕ホントに主人公だよな?

ホントだよな?

がくり。

ブロンズはしんでしまった！

「ブロンズ……。すまん。言うの忘れてた……。」とリカルドが申し訳ないと言わんばかりの顔をして、言う。「Jの野郎は超鬼畜ヘビースモーカーなんだよ……」

店内からは未だに黒煙が外に向かって立ち昇っている。煙の量が半端ではなかった。まるで火事の様だった。しばらくすると、店内から一人の男が体を覆う煙を掻き分けて、ブロンズ達の居る外に出てきた。

タキシードにシルクハット、サングラス、とハードボイルドにキメた、猫背の男が現れた。しかし、その軀は折れそうな程華奢で、顎には無精髭を生やしていた。

コイツがMr. J。「発破屋J」の店主である。彼のトレードマークはいつもくわえているタバコ。それだけ聞けばなんて事はないように思えるが、彼の場合その数が10本になる。

サジは1本。Jは10本。

つまり、Jは超ヘビースモーカーなのだ。ロ一杯にタバコを頼張り、全身でタバコを感じようと、気持ちよさそうに吸っている。いくらタバコでも、ここまで来るとヤク中のアリスと同じレベル、いや同類と呼ぶにふさわしい。

「ヤー、ヤー、ヤー。ボーイズアンドガールズ、俺の店に何しに来たんだーい」

容姿がまずウザいが、通販のインチキ宣伝師の様なこの口調により、相乗効果でウザさに拍車が掛かる。

言い終えたJは先ず、クロア達を差し置いて、ブロンズを指さした。「……ユー、そのこのユー。血を吐いて倒れてるそのこのユー。一体全体何があつたんだい？」

「……おご……いが……あが……」しかし、タバコの煙で瀕死になつたブロンズは口が利けなかった。

そこで、クロアが翻訳(?)する事に。

「この糞Fuck er、いつまで待たせんだ、尿道にデイルドー突っ込むぞ、だつてさ」

「おご……おご……(違うよ、の意)」

「豚にレイプされて死ぬ、だつてさ」

「……ち……が……う……」

「このいんきんたむし野郎、だつてさ」

「おい、ユー。ミーの事いんきんたむし、つて言つたね？いんきんたむしつて言つた方がいんきんたむしなんだヨ、オーいんきんたむしつて語感イイネ……」とここでいんきんたむしつてなに？」

「チ コの感染症の事ですう……」因みに今言つたのはアリスだ。  
「オー！いんきんたむしイズ マイ ゴッド！」



第10話 「タバコキ ガイは爆弾狂」 7

Mr. Jとの依頼の交渉は必ず店の外で行われる。店の中がニコチン50倍のタバコの副流煙に蹂躪されているからだ。ガスマスクをつけていない限り、店主であるMr. J以外、誰も彼の店へ入る事が出来ない。

通常、Jに会うには店から外に呼び出さなければならぬのだが、ブロンズは直接店の中に入ろうとした……。結果、ブロンズ は しんでしまった！

嘘です。主人公がこんな簡単に死んではいけません。

リカルドが神妙な顔をして交渉に出た。

「早速なんだが、J。」

「おマエ、アフロでつかくなつたネ」

「うっせえ。お前のお手製手榴弾を150頼む。あと、クレイモアを30。二日で出来るか？」

「オツケーホツケー大丈夫。…… \$8000だネ。何？戦争でも起こすの？」

「おお。死に損ないの軍人共を八つ裂きにしに行くんだよ」

第10話 「タバコキ ガイは爆弾狂」 8

「それって……ハウエルなんたらが連れてるやつかな？」

「……心当たりでもあんのか？」

「あるともさア」Jは口一杯のタバコを吐き捨て、革靴の踵でそれらの火を消した。彼の口臭は途轍もなくヤニ臭かった。「あれだろ？お前らの粉目当てに動いてるボーイズだろ？」

粉……無論、アリスが捌いている覚醒剤の事だ。

「やつぱりな。俺ん所じゃかなりの量のヤクが動いてるからな……」

鼻が曲がりそうな悪臭（口臭）に必死に耐えるリカルド。「自分等の首を狙う奴等は早めにバラした方がいい。……」J。頼むぜ。」

「ラジャ〜。毎度〜」

「んじゃ、二日後また来るわ。そうら、ビッチ、ブロンズ、アリスちゃん。帰るぞ。」



第10話 「タバコキ ガイは爆弾狂」 病院満喫ダウト編

なあ、あれだよな。

ナース服って萌えだよな？

ナースさん最高。

さっきなんかア、俺が仰向けになって人殺しの妄想してたらさあ

ダウト君、瞳孔開いてるよ

だつてさ。

んで、スレイヤーズのナンバーを口ずさんでたらさあ

ダウト君、いいデスポイス

だつてさ。

超カワイくな？

そんなこんなで俺、ナースさんを見る度に、

心臓を斬り裂かれて胸から血のザク口と肉片をぶちまけた挙げ句、  
大量の胃液と共に吐血を繰り返す

くらいドキドキするんだ。

ああ、誰か。俺のドキドキを止めてくれ。

……俺、病院好きだわ。

第11話 「暗躍するキ ガイ達」 1

荒廃。

ハウエル元大尉が率いる軍、「死神の機雷」にはこの単語がよく似合う。

軍の者は皆、薬の快楽に溺れ、薬の為に戦い、薬の為に集った者達だ。

口ハネの片隅にある軍のアジト、廃工場。

そこは内装が錆びて鉄臭く、薄暗い、陰惨な工場だった。

その工場で、男達の叫び声が轟く。

「三度の飯より〜!!!」

「ヤクが好きイイイ〜!!!」

頭領ハウエル元大尉の後に三十人強の彼の部下達が続く。

「弘法はア〜!!!」

「ヤクを選ばずウウウ〜!!!」

「河童のオ〜!!!」

「ヤク流れエエエ〜!!!」

歓喜の声を上げ銃器を振り上げる男達の前にハウエルが立つ。

第11話 「暗躍するキカイ達」 1（後書き）

解説

「弘法はヤクを選ばず」

ベテランの坊さんはどんな薬でもガンギマリできます

「河童のヤク流れ」

河童が薬に溺れていきます。どんぶらこ〜どんぶらこ〜  
アッー！！

第11話 「暗躍するキカイ達」 2

ハウエル元大尉……。

顔に大きな斬傷が走っている、二枚目の大男だ。その男は元軍人ということもあり、かなりの筋肉質で、着ている軍服の上からでも筋肉が盛り上がり分かるほどだ。

ハウエルは長い金髪をたなびかせ、咳払いを一つすると、言った。  
「今夜、エンズ派の教会に夜襲をかける。」

ハウエルを活目する兵達。

「そこには覚醒剤……つまりは俺達の飯が大量に保管されているらしい。それを教会ごと奪うんだ。そしたら……どうなると思う？入ってくる覚醒剤を適当に捌くだけで大金持ちになれるんだぜ？そしてたら毎日の様に薬れるんだぜ？」

狂喜する兵達。声を張り上げ、大音声で吠える。

「覚醒剤！！覚醒剤！！覚醒剤！！」

第11話 「暗躍するキ ガイ達」 3

そして、その夜。

11月22日、午後11時。

エンズ・クライスト・チャーチ。

ダウトが居ない教会はやけに静かだった。

ブロンズ、クロア、アリスの3人は既に床に就いている。

誰も居ない薄暗い礼拝堂の祭壇の上でリカルドは独り、酒に顔を赤く染めていた。

「ういッ。ひいっく。今日は流石に飲み過ぎたかな……ひいっく。」

司教台には酒瓶が無造作に12本転がされていた。

リカルドはこれを一人で平らげたのである。

「あー。頭が痛え。ガンガン響いてくる……」

司教台の席から立つリカルド。自室へ繋がる廊下へと出ようとするが、足がふらつくのと、視界がぼやけるので上手く歩く事が出来ない。

という訳で。

開き直ってほふく前進で向かう事に。

のそり。のそり。

みみずのように床を這うアフロ。正面から見たら戦慄の画になるだろう。

正体不明の巨大な黒い球体アフロがこちらへ向かってゆっくりにじり寄ってくるのだ。

第11話 「暗躍するキ ガイ達」 4

「頭痛えよお、ガンガンするよお、早く部屋に帰りてえよお」

頭痛は酷くなっていくばかりだ。

鈍い痛みが脳の内側からガンガンと響いてくるのだ。

ガンガンと。ガンガンと。

ガンガン。ガンガン。

ガンガンガンガンガンガンガンガンガン！

……。

リカルドはこの音が銃声であることにようやく気付いた。

聖所の方を見る。

軍服を着た男達が教会机から自分に向かってマシンガンを撃っているのではないか。

「間違いない。「死神の機雷」の野郎共だ。

弔い合戦に来たか。クソっ、早すぎるぜ。

その時、アフロにマシンガンの弾が被弾した。

弾は跳弾し、屈折した軌道は聖所の上のマリア像を捉えた。

煙をあげるアフロ。顔面蒼白なりカルド。

「こいつあやべえ……！」

さっきまでの酔いが一気に醒めてしまった。



懐にあるマグナムを出し、応戦する。

マグナムから打ち出されたグレネード弾の爆風が教会机を巻き上げる。

だが、弾幕の嵐は止まない。

――今思ったら、これ奇跡じゃん。ほふく前進してなかったら今頃俺は蜂の巣になってたじゃないか。

「糞ッ!!!」

身の安全に挺するのが精一杯で迎撃どころじゃない。

一旦逃げた方が得策か？

とその時、

「何してるんですか？アフロさん」

アリスが奉献台の陰から、巨大なミニガンを担いで現れた。寝起きなのでパジャマを着ていた。

「ア、アリスちゃ……」

「黙って応戦してください!!」

アリスは叫ぶと同時にミニガンを撃ち始めたが、すぐに寸断された。

敵のマシニングンの弾がアリスの肩を捉えたのだ。

「いッッ……！」 痛みに嗚咽を漏らし、尻餅をついてしまった。

「なッ……！ 大丈夫か！？」 ほふくで駆け寄るリカルド。

「きゃああああ！ まっく くる助ええ！！」

「違う、俺のアフロだ！！……じゃなくて！！ 傷はどうだ！？」

「へ……平気です……」

アリスの傷……。出血が収まれば大した傷ではなさそうだが……これがロリコンアフロの怒りの火種となった。

――俺の可愛いアリスたんを傷つけやがってえええええ！！

「おめーら全員ぶつ殺す！！」リカルドは吠えりと、聖所に向かって思い切りスリツパをぶん投げた。

これまでにない全力投球だ。

怒りの炎で燃えたぎったスリツパの赤い軌道が教会机越しの一人の兵の顔面を捉えた。

するとその兵の首はねじ切られ宙を舞った。

間もなくして、跳ね返ったスリツパが二人目の兵の後頭部に直撃した。弾け散る頭蓋。跳ね返るスリツパ。

三人目。腕を肩ごと持っていた。

四人目。頭蓋骨を半分抉られた。

「…………あれ？ちよっ、これマジで？」

自分が放ったスリツパの様を啞然と見るリカルド。

全くのまぐれらしい。

そうこう言ってる内に早、兵の十人近くが首狩りスリツパの餌食になっていた。

喚きながら退散していく兵達。その跡には屍がごろごろと転がっていた。

スリツパがリカルドの手元に帰ってきた。紅い血で塗れていた。

……。

「必殺！！ブーメランスリツパ！！」

「『必殺』じゃないですよ！！貴方、こんな凶器をクロアさんやダウトさん、その他諸々に投げてたんですかあああ！？」

「うううう…：こんなつもりじゃなかったんだい」

「そのスリツパ何で出来てるんですかああ？！」

「……………鉄」

「そんな事でどや顔しないで下さい！！ていうか、いい年した大人が マークなんかつけないで下さいッ！！」

「んじゃ だ」

「下ネタですか」

「うん」

「ああ、貴方もういいです。おやすみなさい」

第11話 「暗躍するキカイ達」 病院満喫ダウン編

おい。

おいおいおいおい。

幽霊出たぞコンチクショー。

さつき寝てたらさあ。

急に部屋の扉が開いたのよ。

ナースさんが来たのかなあ と思ってたらさあ、

血塗れのおっさんだったのよ。

俺、発狂しながらバットや包丁ぶん回したが……

当たんねえ、死なねえ。

……怖えよおおお!!

愛しのナースさあぁぁん!!!

……。

早く退院してえよお……。

ああああ……。

あ、でも

ナースの幽霊だったらWelcome!!

因みに、クロ姉の見舞いは千切って窓から捨ててやりました。

今思えば……大丈夫だったんだろうか……？

他人に迷惑してなかっただろうか……？

いや、「空からエロ本が降って来たあゝ」って通りすがりの中坊が喜ぶだろ。

何等問題無し!!

登場キ ガイ紹介 ダウト(前書き)

糞絵は後、書かせていただきます！

登場キ ガイ紹介 ダウト

ダウト Doubt

主な二つ名 溝の草刈機

年齢 17歳。

血液型 AB型。

趣味 ネズミ狩り、オヤジ狩り、ナース  
好きなもの ジャパニーズアニメ、ナース

キリスト教エンス派の信者。

エモノはバットと包丁。

殺人狂。また、厨二病でもある。

いじられ役かもしれない。

ナース萌えに目覚めてしまう。

丸縁サングラスが気に入っている。

兄にしたら確実にマズい人。

三日とかからず警察の的になる。

無論、自分が。

戦闘力

殺人テク

厨二

読者人気度

作者寵愛度



キャラクターマソング・Slayer「Snuff」

第1回 わひゃわひゃキャラコン 結果発表!! (前書き)

キャラコンの結果発表!!!

なにやらダウトが叫んでいます。

## 第1回 わひゃわひゃキャラコン 結果発表!!

ダウト「キャラコンドキドキ結果発表ウウウ!!まず、俺っちがなんと1位イ!!みんな拍手う」

クロア「アンタうっさい。しかも嘘ついて。アタシが1位。アンタ3位」

ダウト「黙れバカ!!いつか追い越してやる!!(泣)」

クロア「あっそ、ふくん。あ、2位はアタシのロメオじゃん」

ブロンズ「ロメオじゃないって……え、僕が2位?何も活躍していないのに……」

クロア「まあ、それが主人公の特権ってヤツ。んじゃ次、4位……

……市長?!」

市長「H A I H A I H A I!!呼んだ金?」

ダウト「ふざけんなア!!何でお前がこんな上位に!!」

市長「私のかました一発ギャグが効いたのだよ。あちよー!!」

……。

クロア「ハイ次」

市長「酷いッ!!」

クロア「5位、インポ」

リカルド「酷いッ!!」

クロア「ハイ、ここまで。6位以下のヤツはザマア あと、投票してくれた人、こんな企画に乗ってくれてアリガト」

デイビッド「以上、愛以外を込めて!!」

アリス「うええええん、6位です……」

第1回 わひゃわひゃキャラコン 結果発表!! (後書き)

という訳で、

1位	クロア	54 pt
2位	ブロンズ	38 pt
3位	ダウト	33 pt
4位	市長	32 pt
5位	リカルド	24 pt
6位	アリス	17 pt
7位	Mr.J	8 pt
8位	ケビン神父	4 pt
9位	リコリス	
	デイビッド	
	マイク	0 pt

となりました。

協力してくれた皆さん、有り難う御座いました。

第12話 「スリッパvsキ ガイ共」 1

――次の日の夜……。 「死神の機雷」アジトの廃工場。

「三度の飯より……!!」というハウエルの檄から始まる部隊全員で行うヤクヤクコールが終わる。

そして……。

「あのスリッパどこで売ってるんだあああ!! 通販かしら!! お得な通販かしらあ!？」

「「サー。大尉、オカマになっていてあります。サー」「激昂するハウエルに冷静に受け答える部下達。

「スリッパ一本で壊滅させられる部隊がどこにいるっていうんだ!？バカだろ!？絶対バカだろ!？そいつら!!」

「「サー。ここにいるであります。サー」」

「もういい!!今夜はあのアフロをさらうぞ!!スリッパを奪うんだ!!準備しろ!!」

「「サー。さらうなら女の子がいいであります。ハアハア。サー」

「うるせえ!!おっさんでも我慢するんだ!!おまえ達!!」

そして、夜。

11月24日、午前2時。時間が遅いので日付が変わってしまった。

部隊は5台のエルグランドで教会へ移動していた。

ハウエル達は三班に分かれて作戦を行った。

6人で構成されたA班は車から降りると、気づかれない遠間からへべれけアフロの動きを観察し、こつそりとその後を尾行けていた。27名で構成されたB班は教会を取り囲むようにして待機。アフロが逃げた時、撃ち殺す為だ。

残りの一人、ハウエル元大尉は車内で待機。A班B班に無線で指示を出す。

ハウエルはピーナッツを摘んでいた。蜂蜜と砂糖でトッピングされた飛びきり旨いヤツだ。

「うは、旨えなあ。やつぱこれなしじゃあ生きてけねえよ」呟くハウエル。彼はこのピーナッツで覚醒剤の欲の抑制をしている。食べないと覚醒剤の禁断症状が起き、薬の過剰摂取で死んでしまうのだ。

しばらくすると、A班の無線機からノイズが走った。

通信だ。

ノイズが失せる。

「こちらA班、こちらA班」

「こちらハウエル、どうぞ」ピーナッツを噛み砕くと、甘く濃厚な薫りが口一杯に広がった。

「アフロが自室と思しき部屋に入っただであります」

第12話 「スリッパvsキカイ共」 3

「おう、寝たと見たら捕まえろ」

「「夜這いですか？」」

「「違えよ！」」

強引に無線を切るハウエル。

……。

ピーナッツを摘む。

食べる。

うめえ。

今度はB班の無線が鳴った。

「「こちらB班、こちらB班」」

「ハウエルだ、どうぞ」

「「暇であります」」

「「黙れ！」」

強引に無線を切るハウエル。

B班、外で待機だからつつてもな……。

ピーナッツを摘む。

食べる。

うまうま。

A班の無線機を取る。

「こちらハウエル。応答しろ」

「「こちらA班であります。どうぞ」」

「アフロは寝た風か？」

「「いびきが凄いです」」

「よし……んじゃあ俺がいつつつたら突入だ。わかったな」

「「はい。夜這いでありますね！」」

「違えよ！」

強引に無線を切るハウエル。

……最後、ヤツら妙にハイテンションだったな……、大丈夫か…

…？

ピーナッツを摘む。

食べる。

つまじ。



第12話 「スリッパvsキカイ共」 4

再びB班から無線が入った。

「こちらB班、こちらB班」

「ハウエルだ、どうぞ」

「ヤクが欲しいであります」

「黙ってる！」

無線機を床に叩きつけるハウエル。

……皆我慢してるんだぞ……。

俺はピーナッツがあるから大丈夫だけど。

ピーナッツを摘む。

食べる。

馬。

……。

さて……そろそろ突入の頃合か……？

スリッパ強奪、アフロ誘拐。

アフロを殺害でなく誘拐としたのは、教会をぶん盗った後、そこでの覚醒剤の捌き方を聞き出すためだ。用が済んだら殺す。

指を組んで、鳴らす。

準備は万端だ。

A班の無線機を手にする。

しかしその直後、鼓膜を裂かんばかりの凄まじい重低音が鳴り響いた。

——何が起こった……！？

車のドアを開け、爆発の起こった教会の様子を確認する。

紅い火炎が口ハネの喧噪に満ちた夜空を焦がし、夜闇が立ち上る黒煙を吸い込んでいた。

教会は外壁が抉り出され、A班の者達の炭となった焼死体が教会の庭に転がっているのを、B班の数名が目丸くして見ていた。

――畜生！！悪い被害妄想でもしてるのか、俺は？！

自分の顔をぴしゃりと打つ。

しかし、見る光景は変わらない。

紛れもない現実だ……！

――糞垂れがああああ！！

ハウエルは車に戻り、A B双方の無線機を手を取った。

「ハウエルだ、応答しろ！！」

「こ……こちらB班であります……どうぞ！！」

B班の奴等は突然の爆発に多少取り乱したようだった。いや、そんな事より……。

A班の応答がない……！

爆発で無線機が破壊されたか、それとも……

……！！

ハウエルはB班の無線機のマイクに向かって思い切り叫んだ。

「還つて来い、お前達！！」

「作戦は……スリッパはどうするのでしょうか?!」

「……いいから戻ってこい!!」

「サー、イエス、サー!!」

通信が切れる。

B班は無事還ってこられるのか……?

ハウエルはそう思いながらピーナッツをむさぼる。

そして煙草に火を点ける。

覚醒剤をくるめた特別仕様ではない、普通の煙草である。

ハウエル達は必死なのだ。

覚醒剤が手に入らず手元が枯渇している今、このチャンスをもぎ取らないと後に本当に覚醒剤が尽きて副作用で死んでしまう。非常用のピーナッツにも限界がある。

明日を生きるために、未来を生きるために、今、覚醒剤が必要なのだ。

しばらくすると、喧噪と共に大勢に人影が車に寄ってきた。

「サー！お待たせであります、サー！」 ドアが開かれるとハウエルの見知った面子がずらりと並んでいた。

……無事、還って来れたか……。

ハウエルは束の間安堵し胸を撫で降ろすが、今から皆に悲しい知らせをしなければならぬ事で胸が詰まった。

「みんな、聞いてくれ…… A班からの……通信が途絶えた……」

第12話 「スリッパvsキカイ共」 7

「……そうでもありますか……残念であります」「感傷たっぷり  
に俯く兵達。

と、そこへ一人の男が教会の入り口から駆けて来た。飛び散る火  
の粉でその男の顔の輪郭がはっきりと浮かび上がる。

…… A班のヤツだ!!

その手にはスリッパ。その男は一人になりながらも、スリッパ強  
奪という使命を完遂したのだった。

A班の男はすぐにB班の十九名の中に揉み苦茶にされた。労いだ。  
そして歓声の中、男はハウエルに近付き、結果報告をした。

「サー！ 面目ありません！！アフロを捕らえる事が出来なかつた  
であります！！……おまけにA班残りの五名を失ってしまったであ  
りますッ！！サー！」 男は満身創夷だった。爆風にやられたのだろ  
う。

「いや、いい。お前一人還つて来ただけでも良かった。その上  
スリッパも捕つてこれて上出来じゃあないか……ところで、あの  
爆発、何があつたんだ……？」

「シルクハットに黒スーツを着た痩せ型の男が不意に背後から襲  
つて来たであります」

「グレネードか何かですか？」

「その通りであります。手榴弾グレネードであります」

「そうか……でその後は？」

「窓を突き破り、逃走したであります」

「……よし」ハウエルは答えながらピーナッツを頬張った。「いか、お前等。いまからあの教会に突入する」

「「なッ、何故でありますかッ?!」「ざわめく兵達。彼らが予想もしない事をハウエルは口にしたのである。」

「向こうさん等は寝起きで迎え討つ準備が整ってないんだ、さらにあの悪魔のスリッパはない。しかも相手は四人そこらしか居ないと聞いた。大丈夫だ。やれる。それに、お前等も限界だろう?今晚で覚醒剤と女日照りからはサヨナラだ」

その直後、雄叫びを上げ、各々の銃器をぶん回し、奮い立つ兵達。ハウエルの言葉が彼らの心の琴線に触れたのだ。

「「覚醒剤!! 覚醒剤!! 覚醒剤!!」」

ハウエルも自らを奮起させる為、腹の底から叫んだ。「よっしゃあ、お前等!! 突撃だ!! 俺らの覚醒剤を勝ち取るんだ!!」

「「Uuuuuuurryyyyyy!!!」」

兵達とハウエルは吠えながら教会の入り口：大聖堂へと突っ込んでいった。

大聖堂。

薄暗い視界にはまず、中央通路の両サイドにずたずたに並べられた教会机が入った。そこら中には銃痕が夜空に浮かぶ幾万の星の様に散りばめられていた。相当の大口径だ。

甘ったるい薫りと酒臭い匂いが混ざって嗅覚を刺激する。

覚醒剤はすぐそこだ、天国はすぐそこだ、とハウエルは自分に檄を入れた。

「GO。」ハウエルが囁くと、彼の後をついてきた兵達が少し屈んで先を進んでいった。

すると……

突如、女の声がした。

「やあ、アンタらこんな時間に何しに来たのかい？」

ハウエルの先を行った兵達が目にしたのは、両手にウージーを引っ提げた黒髪の女だった。臍ピアス……ビッチか。

「一応ね、礼拝の時間って決まってるもんだからさあ、アンタ達帰ってよ」両手のウージーを構え、にじり寄る女。「ねえ、帰ってよ」

「どうするでありますか、大尉？」兵の一人が振り返ってハウエルに聞いた。

それに対し、ハウエルは不敵な笑みをこぼしながら言った。「当然殺れ」

直後、銃弾が飛び交った。

女が左に飛び、ウージーを連射する。それとほぼ同時に兵達も各々の銃器を撃ち始めた。

女の銃弾はまず最寄りの一人の兵を捉えた。その兵は瞬く間に血祭りに上げられ、死んだ。

だがその一瞬後、女の左のウージーが兵の弾丸に吹っ飛ばされた。女は一瞬動揺するが、すぐさま右のウージーを構え直す。

しかし、遅かった。

そのとき既に、兵達の後ろに居たハウエルが動いていた。

「Freeeeeeeeeee!!!」ハウエルは兵士を制止したと同時に女の右腕に掴みかかった。

もつれ倒れ込む女とハウエル。

ハウエルは自分の体重で女を磔にすると、彼女の右手首を押し倒す。

そして、その右手にあるウージーの引き金を引いた。ウージーの弾は全て明後日の方向に飛んでいく。

やがて、弾が尽きた。弾倉が空になったのだ。

「お前は『多勢に無勢』っていう言葉知らねえのか？バカ女」自分の股下でもがく女に愉悦の笑みを浮かべるハウエル。

「アタシの名前は『バカ女』じゃない……『クロア』だよ」

第12話 「スリッパvsキ ガイ共」 11 エロ注意(前書き)

今回から数話、エロいシーンが続きます。

まあ、でもここまで読み進めたあなたにはこれに耐えうる相当の免疫があると私は信じています。

by

作者



「OK…クロア」

「大尉…退がって下さい、弾が当たるであります」「ハウエルの背後でクロアに銃を向ける兵達。

「殺るのか？」

「…い…いえ…」

「だろ？」クロアの胸元を掴むハウエル。「男ならなあ、ここは犯るべきところだろうがよオー！」

クロアのスーツを引き裂いた。途端、彼女の膨らみとピンクの乳房が露わになった。

あられもない姿のクロアに劣情がそそり立った兵達は彼女を取り囲み始めた。

「…お前、いつもブラ着けてねえのかよ？下はどうなんだ？」

「流石に濡れた時大変でしょ…ん…！」首筋を舌でなぞられ、一瞬喘ぐクロア。

「はん、このビッチが。気に入った」今度は乳首にかぶりつくハウエル。舌を乳輪に這わせ、吸い付く。

「…く…は…」クロアは身を振り、悶える。

その間に兵達は自分達の膨らんだモノをズボンから引っ張りだし、クロアの顔に押しつけた。

するとクロアは紅潮した顔で艶笑し、「え、何？アンタ達もやる気になったの？数が多いねえ…全員やってあげる」兵達があてがってきたモツの中の二つを適当に選ぶと、両手に一つずつ持ち、シコリ始めた。

第12話 「スリッパvsキカイ共」 11 エロ注意(後書き)

やっぱりこういうシーンは描写が楽しい(苦笑)!!

これ見た友達が何言うかが楽しみです。

クレーム来なきやいいけど。

その間にハウエルはクロアの下腹部に手をやる。

穿いていたスラックスを降ろす。青のスキヤンティ・パンツのク  
ロツチに大きなシミが出来ていた。

「カハハハハハ、もう濡れたのか？ええ？！」

「…そりゃあこんだけ囲まれたら濡れもするでしょ？」

「ああ、そうかい！！」パンツに手を掛け、一気にずり降ろすと、  
浅い茂みの中にサーモンピンクの花びらが見えた。そこからは蜜が  
滴っており、顔を近づけると、むせるような女の匂いにハウエルの  
股ぐらはいきり立った。

興奮で呼吸が荒くなる。強まっていく甘い匂いに合わせ、心臓の  
鼓動も早くなっていく。

茂みに指を滑らせると、瞬く間に花びらの中に埋もれていった。

甘い悲鳴が響いた。

埋もれた指に熱い蜜が絡んでいく。指で中を小突く度にクロアは  
喘いだ。

やがて適当なところでハウエルはそれを止めた。花びらから指を  
抜くと、指先に絡んでいた蜜が糸を引いた。手の平には粘ついた淫  
汁の海が波打っていた。

「さあて、今から19人の兵士に輪姦されるBABY……………気分はどうだ？」

「……………最ツ高」その直後、ハウエルのイチモツがクロアを一気に貫いた。双方の脊椎に電流が走る。悦びの声。

「あッ……………うぁ……………!!…ぁ……………アంతの…太いねえ」  
歓声を上げるクロアをハウエルが容赦なく突きまくる。

クロアは体を反り、蜜を垂らし、押し寄せる快感をむさぼっている。

「ッあ!!…ぁん!!…ぁっ!!…うぁ!!…もっと!!…激しくうッ…!!」  
「体位を変え、今度はクロア自らが腰を動かし始めた。艶やかに光る接合部が腰の振りに合わせ見え隠れする。

振り乱される胸。すっかり乳首が固くなっていった。  
ハウエルが悶えるクロアの陰核を弄る。

襲って来た余りの快感にクロアは思わずハウエルの腹に手をついた。それでも彼女は腰を振るのを止めない。派手な湿潤音が接合部から鳴り響く。

「……………セックスって…!!ホントっ……………最高!!」めくるめく快感によりがり狂うクロア。最早、奉仕をしていた二人の兵の事も忘れている。

「……………あッああ……………イキそう……………！！イクっ！！イクウ……………ッ！！  
あああああッ！！」

ハウエルの体に絡みつき、クロアはついに絶頂を迎える。体が一瞬痙攣し、子宮口から排出される甘い蜜。同時にクロアの中に注ぎ込まれるハウエルの子種……………。絶頂の余韻に恍惚と浸りながらハウエルの横に崩れ落ちる。

すると18人全ての兵の子種がクロアの体目掛けて飛んで来た。ハウエルとの様を見て我慢できなくなった兵達が今までマスをかいていたのだった。

「かは……………かははは……………！！お前最高だ……………！！」果てたハウエル。肩を上下させながら豪快に笑った。

「……………どうも……………」胸元に付着した精を指で絡め取り、味わった。「臭い……………アンタ何日も溜めて来たみたいだね……………」

そして、全身精まみれになったクロアはハウエルを視界の端に置き、自分を取り囲む兵達に目を向けた。濡れた股を開け、痙攣している花びらを自ら広げて見せた。

「……………ねえ、アンタ達……………早くアタシの中に熱い精子吐き出してよ……………もっといかせて……………」

花びらの奥からトクトクと溢れ出す精と蜜のミックスジュース。妖しく光り、痛い程に充血する陰核。

完全に悩殺された兵達がクロアになだれ込む。

群がる男の中で踊り狂う裸体、飛び散る様々な液体、嬌声。皆、甘い快樂の渦の中に溶けていった。

そんな中、仰向けのままのハウエルは蒙矓とした意識で兵達の様子を見ていた。

カハハ……いい女だ。

兵達に輪姦されているクロアにハウエルの股ぐらが脈を打った。彼女はもう八回も犯されただろう……。そう考えたら臓腑の底から劣情が沸きだして来るのがたまらなくなったのだ。

もう一度、アイツの中へ……。コイツを突き立てて……。

兵達の輪に入ろうと仰向けから立ち上がるハウエル。

しかし次の瞬間、予期せぬ事態になった。

立ち上がれない。

明らかにおかしい。

腰に力が入らないのだ。

さっきの騎乗位で腰が砕けた……？

有り得ない。

畜生、何が原因だ……？！

辺りを見回してみる。だが、何の変哲もない。  
ただし少し甘い匂いが鼻につくだけだ。

アロマキャンドルだろうか……？曇っていく思考。

ああ糞、頭がぼやけてきやがった。

……頭？

ちよつと待て。

まさか……？

「あはは、アンタ馬鹿だねえ。ようやく気が付いた？」兵に突き刺されながら踊っていたクロアが突然ハウエルに向かって嘲笑した。腰の振りを止める。

ハウエルは悟った。

媚薬だ。俺達が来る前に媚薬の気体が散布されてあったんだ。俺達はハメたんじゃない、ハメられたんだー

「皆、今すぐ逃げるぞ！！撤退だ！！」

「カモン、アリス！！」

ハウエルとクロアの声が重なった。

その後。

大轟音と共に一台の装甲車が大聖堂の壁を突き抜け、ハウエル達の前に現れた。

一瞬後、装甲車内蔵の機関銃が兵達を碎き始めた。

爆散する臓器。四散する肉片。肉林の世界が一瞬にして血の修羅場と化した。

「隠れる！！教会机を盾にしろ！！」ハウエルが叫ぶ。

だが、彼の号令は叶わなかった。

兵が皆、ハウエルと同じ状態になっていたのだ。腰が入らない。足が動かない。媚薬が彼らの肉欲以外の全てを奪い去ってしまったのだ。当然、理性もだ。理性を完全に失ってしまった輩は未だクロアに取り付き、満たされない肉欲をぶち撒けていた。しかしその輩は皆、その数秒後自らの肉塊をぶち撒ける事となった。理性が少しでも残っていた輩は、ほふくで教会机の陰に隠れた。

それを見たクロアは床に落ちていた軍用ショットガンを手にとった。彼女の裸体は精と血が入り交じった、訳の解らぬ生臭い液体に染め上げられていた。その液体が彼女の四肢を伝い、落ちた。

直後、ショットガンの砲声が鳴り響いた。すると、教会机に隠れていた一人の兵の顔がひしゃげ、目玉や脳髓を飛び散らせた。



第12話 「スリッパvsキカイ共」 18 (前書き)

今更だけだよ、キャラコンの結果出てるぜ。皆ちんチエック!!  
さあ、俺っちは何位かな?

byダウト

「今度はアタシがアンタらを逝かせる時間だよ」コッキング。発砲。コッキング。発砲。辺りは血の海になった。

「糞があああ！！」ハウエルが落ちていたBARを腰に溜め、クロアを撃つ。

瞬間、装甲車が前進し、クロアの盾となった。弾かれる弾。代わりに機関銃の弾丸がハウエルの右腕を貫いた。

「があああああ！！！」突如襲った殺人的な痛みには張り叫ぶハウエル。見ると、右腕の破片が辺りに散らばっていた。砕け散ったのだ。

「畜生！畜生！！畜生があああアツ！！！」痛みによる焦りがハウエルの足を動かした。弾丸の嵐の間を縫って、一心不乱に教会の外へ出る。足の自由が利くようになった僅かばかりの兵達もその後を追う。

外に出た途端、吹き付ける夜風。車に逃げ込め、と足に喝を入れて走り出す。

しかし足を踏み出した途端、吹き付ける熱風。地面を見ると、大量のクレイモアがそこら一帯を占めていた。今ので兵が二人爆死した。

無論、教会に突入した時にこんなものは無かった。

ハウエル達はクロアが時間稼ぎになっていたのかと今更気付く。

後ろから装甲車が徐々に迫る。

どうしたらいい？

簡単な事だ。

「皆！！クレイモアを撃つんだ！！」ハウエルが号令を下す。すると背後にいた二人の兵が撃ち始めた。部下が二人にまで減らされてしまったのだ。ハウエルの頭の中を「絶望」の二文字が巡る。爆炎と爆煙が爆音と爆風と共にハウエルとその部下計三人に襲いかかる。

前方の全てのクレイモアを撃つて誤爆させ、道を拓く。

出来た道を黒煙の中、突き進む。

地雷原の中腹に來るとようやく煙が晴れかかり、視界が明瞭になつていく。

だがその明瞭になつた視界に真っ先に現れたのは、スリツパだった。

煙を掻き分けて飛んで來たスリツパがハウエルの右にいた兵の頭を刈り取つた。ハウエルの頬に大量の返り血が降り懸かる。

煙と視界が完全に晴れた。ペンライトを前方に向ける。地雷原の向こうに男が居るのが見えた。

アフロ……リカルドだった。

「持っているスリッパが一つだけな訳ねえだろう」リカルドが自身の紅いマントを広げた。すると、マントの内側に悪魔のスリッパが何十足並べられている戦慄の光景が垣間見えた。

「うらああああああ！！」ハウエルが撃つ。

「甘い！！」それに反応したりカルドは丁度『礼』をする様な形で前傾した。

直後、ハウエルの放った凶弾が全てアフロに弾かれた。

リカルドは『礼』をする事で自身の巨大なアフロで体を隠し、盾にしたのだ。

その間にハウエルの最後の部下が死んだ。ブーメランの要領で返ってきたスリッパがその心臓を貫いたのだ。

「チエックメイトだ、ハウエル元大尉」

「あああああああああ！！」大絶叫するハウエル。再び返ってきたスリッパが彼に迫る。

どすつ。

口ハネの漆黒の夜闇に鈍い音が響き渡った。

第12話 「スリップVSキ ガイ共」 終戦 1

ハウエルが死んだ。部下諸共皆殺した。

エンズ派は見事、迫り来る『死神の機雷』を迎え討ったのだ。

戦争に勝ったのだ。

との訳なので……。

「祝勝会じゃあああああああ！！」大聖堂の司教台。顔を酒で真つ赤に染めたりリカルドが景気良く叫んだ。

しかし、返事がない。

クロアとアリスが呆然とした顔で彼の顔を見つめていた。

「あ……あれ？どした？」

「……アタシ寝るよ。おやすみ」クロアが動揺するリカルドに背を向ける。「久しぶりに犯されまくったから疲れた……」

「良かったんじゃないのかよ？ビッチ」

「冷静に考えて。21Pだよ21P」クロアは眠たそうに生欠伸を一つすると、薄暗い祭壇の脇に消えていった。「流石のアタシでもいき死ぬんじゃないかって思ったよ……」

第12話 「スリッパvsキ ガイ共」 終戦 2

21P……。半端じゃねえ……!!

クロアの言い分に従って身震いするリカルド。

だが、あの時間稼ぎの策は彼女自身が提案したものだった。二十人も数を相手にしなければならなくなったのが誤算だったが。

クロアが消え、今度はアリスに目を移す。

リカルドは何か言いかけたが……止めた。

アリスが立ったまま寝ていた。

しかし、瞼は閉じず、目玉だけをひん向き返したその寝顔はとてもとても恐ろしかった。

基本、彼女の就寝時間は午後九時。今は午前二時を裕に越している。

無理はないと言えそうだが……

アリスをこのまま恐怖のオブジェとして放置するのは余りにも恐ろしすぎたので、起こして、部屋に帰って貰った。

そして、大聖堂に残ったのはリカルドとMr・Jだけとなった。

第12話 「スリッパvsキ ガイ共」 終戦 3

「J。一杯どうだ？」ジヨッキを掲げるリカルド。

「ワタシ、ワインしか飲めませ〜ん」

「そうか……、お前には本当に感謝している。俺達の注文の品を予定よりも一日早く、しかも直送で持ってきてくれた……。おかげで迎撃が上手くいった。ありがとう。だが……お前、室内でブツを爆破させるってどうゆうこった。おかげで廊下の壁に穴が開いた。この野郎。弁償しろ」

「か……勘弁してくれ、boy」

「しかもこんな夜遅くに……不法侵入罪で訴えるぞ！！」リカルドはJの肩を掴み、力任せに揺さぶる。

「……あのアーミー達殺したんだからいいじゃないかYO……」

「あんな四流野郎共は俺の手にかかりやどうにでもなった！！」

「……帰りたいYO……」

「うるせえ！！」

それから酔っぱらいリカルドのグダグダ説教が五時間延々と続けられた……（夜が明けました）

登場キ ガイ紹介 リカルド

リカルド      R e c a r d o

年齢            52歳。

血液型         O型

好きなもの    アルコール

キリスト教エンス派の神父。

エモノはマグナム。インポなのにマグナム。またはスリッパ。アル中。常に酔っている。

前世はクジラ。

一分間、アフロで何回銃弾を跳ね返せるかの世界記録保持者。スリッパ大好き。

もしお父さんだったらマズい人。

間違いなく奥さんが発狂する。

戦闘力

酒

スリッパ

読者人気度

作者寵愛度



第13話 「キカイ、覚醒す」 1

「死神の機雷」との戦争から二日……。

驚異の回復力でダウトが早期退院した。入院期間、最初の予定では二週間だったのだが、彼は三日で退院したのだ。

午後一時の昼時。ダウトを迎えに行ったりカルドが教会に帰ってきた。

「ただいまア」とリカルドが気だるく言うと、

「ヒューーホアー！ー！やっぱここの空気は最高だぜええー！」彼の横にいたダウトが大きく息を吸い込んで、開口一番、いきなり叫んだ。

大聖堂ではブロンズが昼食のホットドッグを頬張っていた。突然の奇声に驚いた彼はそのホットドッグを慌てて床に落としてしまった。

「ああ…ホットドッグが……」

ダウトに挨拶をしたのはそれから数秒後だった。

「……あ、た、退院おめでとう、ダウト君」

「いやあはあははは、ありがとう、お礼にお土産、これあげるよ」

憎らしい笑顔を振りまくダウトがニヤニヤしながらブロンズにのど飴を渡す。

「あの、僕、のど飴いらななんですけど、ホットドッグ欲しいんですけど」

「ホット熱い！ー！ドッグ犬！ー！」

「あつ、今から裏路地行かないでね」

自分の前に犬の丸焼きが転がり込んでくるのを予感したブロンズは冷静に答えた。

第13話 「キカイ、覚醒す」 2

「うひゃわあ、ダウトオ、こんにちはですう」

ガンギマリ状態のアリスがよたよた壇上に現れた。

「おう、ガキ。元気にしたかア？」手を振るダウト。「土産取ってきたぞ、受け取れ」

のど飴を放り投げる。アリスが犬のようにそれに飛びつく。キヤツチすると、美味しそうに飴を口の中で転がした。

しばらくすると、クロアが姿を現した。

「あつ、厨二」ダウトを見つけると、目を細めて言った。「アタシの見舞いはどうだった？」

「とてもおもしろかったです（棒読み）」ダウトは言い終わると、何かを思い出し、突然目の色を変えてクロアに責め寄った。「そうだ、馬鹿！！いや、クロ姉エ！！お前には特別な土産があるんだっ  
た！！！」

鼻息を荒くし、大きな紙袋をクロアに手渡す。

「中身、何？デイ ドー？！バイブ？！AV？！AVだよね？！」

クロアは、ぬいぐるみを前にした幼女のように目を輝かせた。

「俺様からのプレゼントだ！！開けてみるイ！！！」

第13話 「キガイ、覚醒す」 3

「オツケー」クロアは渡された袋を開け、最寄りの教会机の上  
に中身をぶちまけた。

清潔感のある淡いピンク色の服に赤十字が描かれた小さい帽。さ  
らにオマケに体温計……。

……果たして中身はナース服だった。

「……お前……何処でこんなモノを……？」リカルドが呆然と机  
上のそれらを見る。

「日本の『アキバ』ってトコだ。その限定品を取り寄せて貰っ  
たのだ。つーわけでよ、クロ姉！！」ダウトが鼻の下を伸ばしての  
土下座。「コスプレお願いしやすッ！！」

一瞬の沈黙。木枯らしの風が入り口の大扉から舞い込んだ。

「ダウト……」

「クロ姉……？」クロアが土下座のダウトに近づく。

「ありがとッ！！アタシ、一回これ着てみたかったんだよねえ！

！」満面の笑みでダウトの頭をワシワシと撫でる。「早速だけど着  
替えていい？！」

「もちろん！！」

第13話 「キガイ、覚醒す」 4

やあ、お久し振りのブロンズだよ。

ルンルンのランランのクロアが着替える為に自室に戻ってから五分が経ったんだけど……ダウトの話に出てきた『アキバ』ってどんなところなんだろ。

あつ、そついやドイツのニュース番組で『アキバ』の特集やってたなあ……。

道端で沢山の従者さんが通行人に頭下げてたなあ……きつと高邁な貴族達が住む大古都なんだろうな。

あつ、クロアが帰ってきた。

「お待たせ、似合ってる？」壇上に現れたピンクの白衣のクロアが色っぽく腰を擦らせた。

白衣が彼女の腰の括れをそのままに描き出し、いつもより一層の色気を醸し出している。胸元もはだけたままだ。さらに、服の桃色が彼女の童顔によく合っており、少し小振りな赤十字帽が可愛らしかった。

そんな可憐な姿の彼女が赤十字帽を整えながら、壇上から聖所へと降りる。

途端、瞳孔の形がハートマークのダウトが飛びついた。

「うっはア！きゃんわいイイイ！」

「アンタみたいな変態殺人鬼に言われても何も嬉しくない!!」  
迫るダウトを突き返したクロア。ブロンズの方に目を移す。「どう  
?ロメオ」

第13話 「キガイ、覚醒す」 4（後書き）

あれ？なんでだろ。

前話のエロシーンより今回の方が書くの恥ずかしかった。

b y 作者

「……あっはっはははは……に、にあ……似合うんじゃないかなあ……」あつ、分かった。僕こついうの免疫無い。

なんていうか、体が拒絶反応を起こしてる……。

「ロメオ〜」案の定、クロアは僕に体を擦り付けてきた。「本気でそろそろHしようよ……」

「こッ、こ……こ……こここ断る！！」意識してないのにもつてしまう。これがナース服の魔力か？ああ、もうなんかヤだ！「僕なんか童貞のままでもいいんだアアアアアア！！」

僕は誘惑するクロアを突き飛ばした。

尻餅をつく。

「ああッ……！！」クロアが悲鳴を上げた。

……。

「あ……はア……う……！！」クロアの顔が次第に紅潮していき、まるで何かを堪えるように俯いた。息が上がる。身を振る。

第13話 「キガイ、覚醒す」 6

「ど……どうしたの……？」僕はクロアの顔を覗き込んだ。

「注……射機……！」クロアは俯いたまま、涙声で話す。

「刺さったの?!どこに?!すぐにお医者さんに診て貰わなきゃ  
!!!」

「刺さって……ない……」

「はい？」

「挿入った……膣に……あ……!」

あれ？

もしかして僕、主人公史上最悪の暴拳を行いましたか？

っていうか、えええええええ……!?

「ハツハハハヒハヒハハアア!!腹があゝ!!腹があゝ!!」抱  
腹絶倒するダウト。彼には、クロアが突き飛ばされた拍子に白衣の  
ポケットから落ちた注射機に、彼女の股間が被さる一部始終が見え  
ていた。「お前、馬鹿鹿!!ヒヤハハハア!!」

そんなダウトを尻目に、クロアはゆっくりとその場から立った。

第13話 「キカイ、覚醒す」 7

「注射機……抜けない……………」

「はいいいひいひいひい!?」ねえ、これって性犯罪なの?僕って性犯罪者になっちゃうの?!

「引つ張つてよ……」

「ヤだ」

すると、クロアがりカルドに目を移した。

「インポ…これどうしようか……………」

「頑張れ。キリスト様からの試練だ」リカルドは親指を立てた。クロアは中指を立てた。

「ここはれすねえ、オナぬーをしたらいかげひよう?」と、よたよたアリス。「愛液が潤滑油によ代わりになるハズれすう。うにや。」

「ああ、そつか。んじゃあやろうか」

「ここでするなよ」リカルドが制止を掛ける。

「え〜?!ここは読者にサービスしないといけないで……………」

「黙れ!!お前なあ、前回沢山えつちなシーンがあつたが、今回もとなるとこの小説が完全にエロ小説になるぞ!!作者のアカウント消されても知らねえからな!?!」

「…………ハイハイ」



第13話 「キガイ、覚醒す」 8

渋々と自室に戻ったクロア。

それから二時間後……。

「抜けない〜!!」 ナース服のままのクロアが泣きながら壇上に現れた。

「え、何？」と、ブロンズ。聖所で昼寝の真つ最中だった。傍らにはニューヨークタイムズが無造作に広げられていた。そして彼女の姿を見た瞬間、目が醒めた。

うげえっ、ナース服だ!!

「11回もオナつてみたんだけど全然ダメだったんだよ〜!!」  
クロアがブロンズに抱きついた。しかし、次の瞬間、彼女は突き飛ばされていた。

「嫌だああ、僕は童貞の道を歩んでいくんだああああ!!」

突き飛ばされたクロアは為す術もなく尻餅をついてしまった。

「ひあアツ!？」襲った痛みにも、悲鳴を上げた。「ひう……う……!!」

「ごっ、ごっ、ごめん、クロア!! ナース服が僕には見苦しくつて、つつ、つい……!!」ブロンズはクロアの顔を覗いて、精一杯の謝罪をした。だが、彼女からは答えがなかった。口元から聞こえるのは喘ぎ声だけだ。

……え、まさか……？

果たしてブロンズの予想は的中した。

「……体温計が……アナルに……ん……挿入った……あ！」

はあああああああ！？



僕は思いつきクロアの顔を蹴り飛ばして、彼女を気絶させた。  
んで、すぐさま逃走。

……………。

確かに僕は主人公失格かもしれない。

でももう僕はね、なるべくえっちな事は聞き入れないようにって  
決めたから。

クロアファンの読者さん、ごめんなさい。

次の日……。

クロアはリカルドと共に、病院を訪れた。以前、ダウトが入院していた病院だ。

受付を済ませ、待つ事五分。名を呼ばれたクロアは後ろにリカルドを連れて診察室に入り、目の前に置いてあった丸椅子に腰かけた。クロアが対峙したのはこの病院の主治医だった。清潔な白衣を着、顔面に無愛想なホッケーマスクを張り付け、大きな鉈を手に携えた巨漢の、シェイソン・ホーヒース医師だ。

シェイソンがクロアの前で威風堂々たる姿勢で座っていた。血の付いた鉈を眺めながら、猟奇的な匂いを醸し出しながら。

殺される……！！

シェイソンにビビり、おののくクロア。トンデモない奴が来たと顔色が青ざめる。彼に近づかまいと懸命に丸椅子をジリジリと後ろへずらしていく。

しかし、次の瞬間。シェイソンの鉈がクロアの丸椅子の脚を捉えた。そして一気に彼の下へ引きずり戻された。

「ああああああ！！！」クロアの恐怖の絶叫が診察室に木霊した。

第13話 「キガイ、覚醒す」 10（後書き）

\* 注意 \*

この物語は映画「13日の金曜日」とは何の関係もありません。  
ましてや、その中の殺人鬼、ジェイソン・ボーヒーズとも何の関  
係もありません。

「クロアさん」

「……………え？」

「他の患者さんに迷惑です。お静かに」

「……………は？」

「お静かに」

「……………はい」 ジエイソン・ポーヒーズクリソツ男の生真面目な態度に面食らったクロア。意識せずも、敬語になってしまった。

それを見たシェイソンは手に持った鉗を床に刺した。酷く甲高い金属音が鳴り響いた。「さて……………貴女。膣口に注射器が刺さり、肛門に体温計が刺さったと？」

「はい」

「何をどうしたらこうなるんですか？SMですか？」

「……………はい……………」 本当のことを話せば面倒な事になるのは見え見えだったため、そのまま切り返す。  
すると……………。

「……………それじゃあ手術をしましょう。膣と肛門を切除します」 シエイソンはいきなり床に刺した鉗を引っこ抜いて、振り回し始めた。  
「キヤアアアアアアアアア！…！！！」

丸椅子を倒し、診察室から逃げ去ろうとするが、シェイソンの鉈がそれを許さなかった。刃先を襟の後ろに引つ掛けられた。強引に引き寄せられる。

「じゃあ違うのにしますか？お手軽なのがありますよ」

「……はい」

「手術は簡単です。下半身を切除します」

「簡単だけでも文句無く死ぬウウウウウウー!!」

「……じゃあ薬で処方しましょう。すぐに楽になりますよ」「シェイソンのホッケーマスクがクロアの顔に近づいた。

「嫌な予感しかしないんだけど……」

「それではさようなら、次の患者さんが待ってます」

「ハア?!診察は?!ねえインポどこにかしてよ」

クロアはなんとか状況を打開させようと部屋の隅に座っていたりカルドの方を振り向いた。

……。

リカルドは気絶していた。

唇から泡を零し、白目をひん向いて、爛れるように座っていた。当然、返事は無い。



「インポオオオオオオ！！！」絶叫したが、案の定目覚めてはくれない。

そうこうしていると、突如、シェイソンの太い二本の腕がクロアの身体に巻きついた。

「ちょ……！！やめて……！！」抵抗しようともがくが、無駄だった。剛腕はびくともしなかつた。それどころか、力が更に上乘せられていく。

「……か……あ……」苦しみから思わず、口から喘ぎ声が洩れた。するとその時、クロアの口の中に二錠の黒い丸薬が放り込まれた。

「……！！」クロアはそれを飲み込んでしまった。途端、突如として意識が混濁し始めた。

「すぐに楽になりますよ」遠のく意識の中で、シェイソンの言葉だけが延々と脳裏に響き渡る……。

第13話 「キガイ、覚醒す」 14

それから七時間後。

クロアは教会の教会机の上で目覚めた。夜闇で微かに霞む大聖堂には誰の影も認められなかった。

「……………ん……………」

起き上がったところで、ある違和感がなくなっている事に気づく。試しに下腹部をまさぐってみる。

注射器と体温計がない！！

嬉しさにガッツポーズを決める。これで明日安心して男娼屋のところにに行ける！！

ただ……………

いまちよつと寂しい。

下の口が寂しい……………。

半日注射器を啜えっ放しだったアタシのお がち 二欲しさに疼いてる！！

よし、ちよつとロメオを襲ってくるとうしよつかな。

そう思ったクロアは、司祭壇に上がり、廊下へ続くドアを開けた。

「あ。」扉の向こうにいたのはブロンズだった。パジャマを着た彼は、何とも気の抜けた欠伸をかました。

運の良い事に、バツタリ、鉢合わせだ。

「ロメオ」 「間髪入れず、クロアはブロンズに抱きついた。彼の胸に顔を埋めた。「アタシ、アンタとやりたくて堪ないんだよお？だから一緒に朝まで……」

クロアの言葉を遮ったのは、ブロンズの、冷たい恐怖に満ち満ちた慄きの目だった。

「……クロア……君……まだナース服なの……！？」

後日、クロアはシェイソン医に尿道に挿入ったシャープペンシルを摘出するハメになりましたとさ。

登場キ ガイ紹介 市長

マルク・チャップマン市長

年齢 63歳

血液型 A型

好きなもの 金、秘書のリコリス

宗教の街、ロハネの市長。笑顔がとつても素敵です。

お金大好き。ものすごく大好き。

得意ネタは「あちよー！！」。この一発ギャグで多くの読者の心を掴んだ。

リコリスたん大好き。お金の次に大事。本妻？んなもんほっとけ。クロアが認める程の浮気癖あり。

もしこの人がおじいちゃんだったら酷い。

孫に一銭もやらない糞守銭奴。いやああああああ！！

戦闘力

金

リコリス愛

読者人気度

作者寵愛度

キャラクターマソング・「ゴッドファーザー」のテーマ

第14話 「肥え太るキ ガイ」 1 (前書き)

やった〜!!!

この小説あともうちょっとで終わるぞ〜!!!

あとたったの6500話!!!

うおうえええええええええええええええええ!!!! (嘔吐)

第14話 「肥え太るキ ガイ」 1

ブロンズの旅行記 〔111/29〕

やあ、僕だよ。ブロンズだよ。

僕ねえ、このロハネに来てからベッドの中で毎日、夜、日記を書いているんだ。偉いでしょ。

今日はこの小説を読んでくれている君たちにちょっと言いたい事があるんだ。

……………その前に一つ。

今から僕が話す事は、全て真実だ。

全部本当の事であって、……………決して嘘じゃない。だから、みんな、信じて聞いて欲しいんだ。

……………。

うん。よし、分かった。信じてくれるね。

それじゃあ話そうか。

十一月二十九日。

僕らに訪れた史上最悪の悪夢について……………。

第14話 「肥え太るキ ガイ」 2

午前九時。

僕は礼拝堂で朝食を摂っていた。

今日はクロアの料理だった。

「はい、えぶりばでー アタシの愛一杯の料理だよ」  
ルンルンのランラン、超ご機嫌のクロアが壇上に現れた。

僕は適当な教会机を選んで食卓とし、それを囲んで今か今かと朝食が来るのを待っていた。

僕の隣に座っていたダウトは、昨日録ったアニメがあるんだ、早くしてくれ、とブツブツ唱えながらキッチンナイフとフォークを机に叩きつけていた。

ひよんなダウトは朝食を持ったクロアの姿を確認した途端、犬のような荒息を立てて「うおおあああ！！待ちくたびれたぜ、早くしてくれ！！じゃないと俺、『魔法少女リルナのは』見れなくなっちまう！！ああああああああ」と発狂し、彼女に飛びかかった。



第14話 「肥え太るキ ガイ」 3

「ちよつと、『いただきます』は!？」

「黙りんこおおお!!!!」ダウトはクロアから強引にプレートを奪うと、狂喜乱舞……狂ったように喜び、乱れ舞いながら自室へ帰って行った。

彼の姿が消えると、クロアは舌打ちし、ぼやいた。

「……アイツ、アニメと一緒に滅ばないかな……」

「さらつと酷い事言っちゃった!！」

「んじゃ、ハイ、ロメオ、ヤク中」今のでクロアは多少、気を損なったようだ。僕とアリスの前に、プレートを一つずつ並べると、最寄りの教会机の上に、ふて腐れたように寝転んだ。

第14話 「肥え太るキ ガイ」 4

僕はご機嫌斜めのクロアを視界の隅に置き、プレートのと真ん中の目玉焼きにナイフを入れた。切れ端をフォークで刺し、口の中に運ぶ。

「……クロア……おいしいよ……」

「……そう」

本日の天気は大荒れの模様です。

……ところで……あれ？

アフロ様は？

正義の味方、アフロ様のお姿がお見えになれないのですが。

いつも朝はこの礼拝堂で豪快にお酒をあおっているんだけど……

「クロアさん、リカルドさんの姿が見られないんですが、どうしたのでしょうか」その数秒後、唸る僕に呼応するかのようにはアリスが訊いた。

しかし、返ってくるのは、知らない、という気の無い返事だけ。

うーん。

まあ、いいか。

しばらくしたら来るだろう。

寝坊か何かだろうね。

第14話 「肥え太るキ ガイ」 5

グラスに入った水を飲む。

「ごちそうさま」

「……………」

アリスは僕の横でまだ朝食と格闘していた。  
席を立つ。

……………。

ダウトに何か言っただけでやらなくちゃ。

廊下へ続く壇上の扉に向かいながら文句を考えると、その扉からようやくリカルドが出てきた。

「おはよう」「いつもより覇気の無い挨拶。

どうしたんだろう。取り敢えず、訊いてみた。

「いや、今朝起きてからずっと頭が痛いんだよな……………」

「そうですか……………」

なんか今日、厄日なのかな……………。

……………！！

天井を少し仰視した刹那、僕は戦慄した。

アフロ様のアフロが……………

むくむくと大きくなっているではないか……！！

「ぎゃあああああああああ！！」

「なんだ、どうかしたのかブロンズ！！」

「アフロ、アフロ……あ……アフロ……アフロアフロ……アフロ！  
！」

「アフロが何だっって……おわあああああああ！！何じやこりやあああああ！！」事をようやく知ったアフロ様も絶叫した。

アフロが膨らんでいる。現在進行形だ。

今、その大きさはいつもの二倍。

日本の遊園地、東京ディズニーシー入口の地球のモニュメント並みだ。



第14話 「肥え太るキ ガイ」 7

ーぶっこわしてやりやあいんれすう〜

直後、砲銃の断続的な轟声と共に放たれた銃弾の嵐が膨張を続けるアフロを飲み込み始めた。

ブロンズが後ろを向くと、なんと、スーパーラリラリモードのアリスちゃんが魔法対戦車用ライフルのステッキをフリフリとぶっ放しているではないか！！

「悪霊退散〜 わひゃひゃひゃひゃひゃひゃ」

ブロンズは絶句した。

リカルドは失禁した。

前文で笑った読者はよく考えてみてほしい。覚醒剤でラリった愛娘が自分の髪の毛を的に対戦車用ライフルを乱射する構図を。失神しなかったリカルドは大健闘である。

だが健闘空しく、百数発の弾丸に晒されてなお、彼のアフロは全くの無傷だった。



「すみません、検診に参りました」

早あああああああ！！

四人は礼拝堂の入口の大扉を注視した。

そこには鉈を携えた聖口ハネ・ブリッツツ病院主治医、シエイソン・ホーヒースが立っていた。

悲鳴がこだました。



「おお、これはこれはクロアさんじゃないですか。昨日はどうも膣と尿道と肛門は大丈夫ですか？」

「あ……あは……あはははは……」クロアの顔が引き攣る。トラウマが蘇る。

「ところで、患者さんは何処ですか？……ああ、この方ですね」シェイソンは天井高くそびえ立つアフロを見上げた後、リカルドに目を合わせた。「はは、貴方でしたか。昨日はどうも」

リカルドは返事を返そうとしたが、恐怖で声が出なかった。もう一度、失禁した。

「うゝむ。わかりました。手術をしましょう。手早に出来ますよ」

「おおっ」

「頭部を切除します」

「ぎゃああああああああああああああああああ……!!」

「ハイ、仰向けになつて」

「無理です（物理的に）」

「怖がらないで結構ですよ？痛みは一瞬ですから」

「そうだけでも!!」

シエイソンはそれから一息置くと、いきなり鉈を振りかざした。

「ぎゃああああああああああ！！」

リカルドが大絶叫した。

すると突如、DVDデッキを掲げて発狂するダウトの姿が祭壇上に見えた。そしてダウトは何か喚き散らしながらリカルドのアフロに突っ込んできた。

「俺様のクソデッキがぶっ壊れやがったああアア！！ブルウウウウレイに買い替えやがれえええええええ！！」

アフロに向かってデッキを投げた！！

ぽよんっつ。

跳ね返された。

猛然と包丁を振り下ろす！！

ぽよんっつ。

跳ね返された。

バットで撲打！！

ぽよんっつ。

跳ね返された。

「Noooooooooooooo!!!!」  
「ダ」  
ウトはムンクの「叫び」のように顔を歪ませた。

第14話 「肥え太るキ ガイ」 11 (前書き)

すみません。高校のテストが近いんで多分一週間ほど投稿できません。

そして血を吐くように叫びながら地べたを這いまわっていると、不意に彼とシェイソンの目があった。

「あ……貴方は……!!」

「お……お前は……!!」

眼を見つめ合いながら、距離を近づける。

「友よおおおおおお!!」

抱き合うダウトとシェイソン。

その数秒後、シェイソンが言う。

「さあダウト君!!私の力を分けてあげよう!!」

「おおおおおおおおおおおおおおおお!!!!み  
なぎるぜえええええ!!!!」

すると突如ダウトが雄たけびを上げ始める。前に屈み、力を溜める。禍々しいオーラがダウトの背後で稲光となる。大地が揺れる。大気が震える。

第14話 「肥え太るキ ガイ」 12

「狂気100倍!!」

血相を変えたダウトが再びアフロに向かって走り出した。包丁を天に振りかざす。

「アンパンチ暗犯血!!」

次の刹那。

アフロが一瞬にして真つ二つに斬られた。

断面はツルツルのテカテカ。リカルドのアフロはちょうど食卓で困めそうなくらいの丸机のような形になってしまった。

黒いスライスアフロの残骸の先には、包丁を薙いだダウトの姿が。

「灰いい灰いいいいいい禁んんんんんんんんんんんんんんん!!」  
教会内に響き渡るリカルドの悲鳴。「俺のアフロがああああああ  
あああああああああ!!」

残骸の前に跪いた。

第14話 「肥え太るキ ガイ」 13

そんなリカルドを尻目に、ダウトはシェイソンのところに歩み寄った。

「ヤ、ヤ、ヤ！シェイソン！元気にしてたか!？」

「ハイ、おかげさまで!！」二人とも、怖いくらいの笑顔。子供の時からの旧友である。

ハグして握手をした後、シェイソンから話を切り出した。「ところでダウトさん。一緒にポケモンやりませんか？」

「いんや、俺ちよつと今グラセフしたい気分なだけどさ、どうだ?」

「いいですね!！一緒に警官狩りしましょうよ!！」

そうして、ダウトとシェイソンの二人はダウトの自室へと消えていった。

その跡に残ったのは、泣き過ぎて瞼がパンパンになったりカルドの嗚咽と、両断されたアフロの残骸だけだった……。

ふう。怪談話はこれにて終了。

ちよつと日記のページが文字でびっしりになっちゃった。

んでさ、あの後、クロアがアフロ様の部屋を潜入捜査したところ、ベッドが育毛剤で濡れていたらしいんだけど……

11の件とは関係ないよね？



第15話 「キ ガイアワーズ」 1

アリスの部屋。

きれいに整頓された本棚、塵一つないカーペット、真っ白なベッドシート。

中世ヨーロッパをモチーフとした部屋の窓からすがすがしい朝日の光が差し込んできた。

アメリカは口ハネ、今日も快晴。

その朝日で目が覚めたアリスが欠伸をし、ベッドの中から出た。伸びをして、いつもの宗教服に着替える。

さあ、今日は何を吸いましょうか。コーラ（コカイン）？クリスタル（覚醒剤）？

アリスがのんびり考えていると、不意に彼女の目の前を黒い影が掠めていった……

第15話 「キ ガイアワーズ」 2 (前書き)

ハイ、すみません。

何日かぶりの投稿です!!



頭を撫で、なだめると、アリスちゃんはようやく落ち着きを取り戻した。

涙を拭きながら、彼女は震えた声で言った。

「Gが……ゴキブリが……私の部屋にゴキブリが出たんです……」

第15話 「キ ガイアワーズ」 3

ゴ……ゴキブリ……？

僕はクスツと笑ってしまった。

ちっちゃい女の子ってやっぱああいうの苦手なんだね……

「……何かおかしいんですか？」不思議そうに僕の顔を覗き込む。  
「ううん、何でもない」

僕はナイトテーブルに置いていた新聞紙を棒状に丸めた。

「んじゃ、退治に行こうか、ゴキブリを」

「はい。ありがとうございます。お願いします」

そうして僕とアリスちゃんは廊下へ出た。

寝癖を直すのはゴキブリ退治が終わった後でいいや。

第15話 「キ ガイアワーズ」 4

ブロンズはアリスを廊下で待たせ、独り、アリスの自室へ入っていった。右手には新聞紙。左手には殺虫剤。フル装備だ。

部屋はとても整頓されていた。こんなキレイなところにゴキブリが出るのかとブロンズが不思議に思う程だ。

おそろおそろ歩を進める。イキがっていたが、実はブロンズも怖いのだ。アリス程ではないが、ゴキブリが怖いのだ。

「もう外に逃げてますように。もう外に逃げてますように……」  
安手のオモチャのように連呼しながら、尺取り虫のように前進する。

部屋の中心に着いた。体を回して見渡す限りではゴキブリは現れていない。

いや、いた。

細く長い二本の黒い触覚がベッドと床の隙間からニョッキリと生えていた。

第15話 「キ ガイアワーズ」 5

「うわああああああああ！！」痛ましい絶叫を上げながら、殺虫スプレーを噴射する。

触角はベッドと床の隙間の奥へと消えた。

その隙間に、続けてスプレーを噴射した。鼻をつんざく刺激臭が辺り一面に舞う。

咳をしていると、ゴキブリが隙間から這い出てきた。

……………！！

ブロンズは絶句した。

黒光りする体長30センチの巨大ゴキブリが足元から姿を現したのだ。

勝てる気がしない……………！！

そして、心の底から気持ち悪い！！

「おうええええええええええ！！」ブロンズは聞き苦しい嗚咽を漏らしながら部屋を後にする。廊下に出た。すると、待っていたアリスが心配そうな顔をして訊いてきた。

「……………大丈夫ですか？」

ブロンズは首を横に振った。



第15話 「キ ガイアワーズ」 6

そこへダウトが通りかかった。「よお、ブロンズ……どした？禁固囚みてえに顔真つ青にして」

「ゴキブリが……ゴキブリが……」ブロンズは唇を震わせながらアリスの部屋のドアを指差した。

「ロリガキの部屋にゴキブリい？珍しいな」ダウトは首を左右に鳴らす。「ブロンズ。そんな雑魚も掃除できないようじゃ、お前もまだまだだぜ。よし、ちよっくら殺ってくるか」

ブロンズは少タイラつときたので、ダウトにゴキブリの詳細を一切明かさないうちにした。僕と同じ気持ちを使わせちゃえ、と。

ダウトが扉を開け、アリスの部屋の中へ入っていった。

しかし、あつと言う間に帰ってきた。廊下へヘッド・スライディングを決めた。

第15話 「キ ガイアワーズ」 7

「ゴキー!!ゴキー!!ゴキゴキー!!ゴキブリ!!ゴキブリ!!ゴキブリ!!ゴキブリ!!!」  
「ダウトは顔を上げると狂ったように連呼し始めた。」

「あの……ゴキブリが嫌いだったなら退治に行かなくてよかったですよ……」

「違えんだよ、クソロリ!!数が……!!!!」

その時、爆発音が鳴り響いた。

見ると、アリスの部屋のドアが爆散していた。そしてそこから百を裕に超える巨大ゴキブリの大群が波のように押し寄せてきた。

「ぎゃ あああああああああああああああああああああああああああああああああ!!!!」

三人は戦慄の画に悲鳴を上げた。

走り逃げる。が、ゴキブリは想像を超える猛スピードで追いかけてくる。

叫び過ぎて喉が潰れてしまいそうだ。

「糞おお！！ここはサイレント・ヒルだっつかああああ！！？」

「取り敢えず、どこかに逃げないと保ちません！！」

「礼拝堂に逃げ込もう！ね！？」

「そうしましょう！！私のミニガンもありますし！！」

三人は廊下の最端、礼拝堂への扉に滑り込んだ。

そこにはクロアもリカルドも居なかった。無人だ。

壇上の司祭台に向けて走ると、再び扉が破壊された。礼拝堂に黒渦が侵犯してきた。

そこでようやくアリスが司祭台に隠してあるミニガンを手にとった。

「よっしゃ！！ぶっ放せ、クソロリ！！」

ダウトの喝と共に、ミニガンの銃口から閃光が放たれた。

無数の弾が無数のゴキブリ達の体を粉碎していく。が、黒渦の動きを止めるには足らなかった。

「きゃあああああああああ！！」止まらない黒渦の中にアリスが吞まれてしまった。もがいた腕が消えたきり、彼女の姿を確認する事が出来なくなってしまった。

第15話 「キ ガイアワーズ」 9

「おわああああああああああ！！アリスちゃあああああん  
！！！！」

「だああああああああああああああ！！振り返んなブロンズ！！走れええええええええ！！」ダウトは礼拝堂の端に辿り着くと、ステンドグラスをバットで打ち砕いた。「オラ、ここから逃げつぞ！！飛び込めええええ！！」

「あちよー！！」ブロンズが飛び込んだ先は墓場だった。エンズ・クライシスト・チャーチの東側には枯れ木に囲われた薄明るい墓場がある。

この墓場には主にダウトが殺した輩達が眠っているが、最近埋葬したのはハウエル元大尉だ。

そのど真ん中にリカルドと修道服姿のクロアが居た。

リカルドは秋の枯れ草が茂る地面に跪いていた。彼が対峙していたのは、墓標。墓標には文字が刻み込まれていた。

「神父のアフロ上半分、ここに眠る」……。

リカルドの後ろに居たクロアが彼を呆れと軽蔑の目で彼を見ていた。

「ねえ、クソアフロ。アンタいつまでアフロネタで喰っていくのさ？」

するとリカルドは俯いて言った。

「この身が減ぶまで」

……何してるんだろ、あの人……。  
いや、そんな事より取りあえず助けて貰わないと!!

「クロア!!アフロ様ア!!助けてえええ!!」ブロンズは力の限り叫んだ。すると、クロアとリカルドはこれに呼応した。

「何!?そのGの大群!!気持ち悪ツ!!」  
「こつちに連れて来るなあああ!!」  
「きやあああああ!!」  
「だあああああ!!」

逃げ去られてしまった。

……。

気付けばいつの間にかダウトの姿も見えなくなっていた。  
独りになってしまった。

後ろを振り向く。  
気色の悪いGの大群が目の前にまで迫っていた。

……。

ねえ、これ詰チエックメイトんでない？

ぴぎゃあああああ！！

ブロンズは泣き叫んだ。すると突如、彼の体が爆風で吹き飛ばされた。

土まみれになりながら、地面を転がった。止まると、服の焼け焦げた匂いがした。

「ブロンズ！！」

声がしたのでブロンズはその方を向いた。

振り向いた先は教会の屋根の上。そこにダウトが立っていた。

「ブロンズ！！退けや！！」

ブロンズが声に従うと、彼の目前で大爆発が起こった。群れを成していたゴキブリが一斉に金切り声を上げて炭と化した。

また爆発。黒渦が散り散りになる。

どうなってるんだ！？

何が起こってるんだ？

ブロンズが思うと、ダウトの後ろから人影が現れた。

始め、爆炎で輪郭がぼやけていたが、やがて、解った。

Mr・Jだ。

「ヤ、ハッピーボーイ 助けてやるYO！！」Mr・Jは手を振ると、手榴弾を投げた。

第15話 「キ ガイアワーズ」 12

「どわあああああああ！！！」

また爆風に飛ばされるブロンズ。彼おかまいなしに投げられる手榴弾はゴキブリを周りの木々ごと粉碎していく。枯れ木の一片が燃え、広がり、辺りは火の海となった。

「オイ、糞J！！もうちょいマトモに投げらんねえのか！？」

「頑張つてマゝス」

「お前えぜつてーマトモに投げる気ねえだろ！？ぶつ殺すぞ！！」

「Oh・怖。」Mr・Jは返すと、手に持った六個の手榴弾のピンを一斉に抜いた。そしてそれらを投げた。

投げられた手榴弾は全て寸分の狂い無く、ゴキブリの群に向かっていき、地面を抉った。

「ハッ！！やんじゃねえか、糞J！！」

「ありがとゴザイマース！」

「んじゃ、俺も行くぜ！！お前えだけ活躍すんのはやだからな」



第15話 「キ ガイアワーズ」 13

ダウトはそう言うと、屋根から飛び降りた。

「覚悟しろよクソゴキ共！！俺様が相手だ！！震えろ！！」そして地面へ降り立った瞬間、

「ぐぼあ！！」彼はあさつての方向に吹っ飛ばされた。

スリッパだ。

しかし、リカルドのそれとは明らかに違う。

便所スリッパだ。

リカルドのスリッパはいつもごく一般の家庭用スリッパだ。それ以外のスリッパは見たことがない。

スリッパが遙か彼方の主の手元へ帰っていった。

便所スリッパの主は、ブロンズが見たことのある顔だった。

ロッキンポ派教祖デイビッドだった。

約一週間前、市長の金を送りに行く道中現れたロケラン野郎だ。

「諸君、南米産ゴキブリのお味はどうかね？けけけけ」  
デイビッドはほくそ笑みながら前に出た。

第15話 「キ ガイアワーズ」 14

彼は自身の教会で一年前からバンド宗教団体を組み、危ないライブミサを開き続け、最近になってファン信者を急激に増やし始めている。

彼はエンズ派にとって、現在最も注視しなければならない敵の一人として存在している。

「出たな、ヘドバン中毒者あー!!」ダウトが包丁を握りしめいきり立つ。「何しに来やがった!?!」

するとデイビッドはメロイックサインを決めた。「ロック異のインポ野郎徒たちをぶっ殺しに参りまちた!!」

「ああ、そうかい!!ならテメエが死ぬ!!」ダウトは包丁を投げ放った。綺麗な真直線状の軌跡を描いて包丁がデイビッドの心臓目掛けて飛んでいく。

しかし、その途中で包丁は叩き落とされた。代わりにダウトの方にスリッパが迫る。

.....!!

スリッパはダウトの顔面に直撃した。彼の身体が血飛沫を上げて後方に吹き飛んだ。

「ユーー！！やり過ぎネ！！」それを見たJは無数の手榴弾をばら撒いた。

が、全て空中で爆散した。直後、爆炎を掻き分けて来た便所スリッパがJの腹を直撃した。

「あべし！！」Jは血を吐いた。悶絶した後、屋根から転落し、枯れ草の茂みの中に消えた。

……………。

あれ？

僕また独りだ。

ブロンズは絶望した。

「ロッキンポはあと貴様一人じゃああああ！！死ねえええええ

！！」

空中でスリッパが屈折し、ブロンズの方を向いた。と思うと一直線に飛んで来た。

その時。

便所スリッパが横から入ってきた家庭用スリッパと弾き飛ばされた。

「！！！？」

デイビッドが向けた視線の先……

そこにリカルドが居た。

「真のスリッパ使いは俺だぞ、糞野郎」

リカルドがスリッパを構えた。「ブロンズ、下がってる。ちょっと危ないぞ」

「……わかった」幸いにも巨大ゴキブリはJによってほとんど駆除されていた。その僅かな残りは全て瀕死でそこらをよるよる這いずりまわっていた。

「お前みたいなおフロが真のスリッパ使いい？」デイビッドもスリッパを構えた。「ふざけるな!!」

双方がスリッパを投げた。次の瞬間甲高い衝撃音が鳴り響き、二つのスリッパが地に落ちた。

その間にデイビッドが投げる。リカルドは手に持ったスリッパでこれを弾き、もう一方の腕で投げた。横にカーブを描いて飛んで行くのをデイビッドが投げて阻止する。

目まぐるしく攻守が入れ替わる。一向に均衡が破れる気配が無い。次第に両者の手数が増えていく。

デイビッドの目の前に二つの家庭用スリッパが迫る。手に持ったスリッパで弾く。

リカルドの目の前に二つの便所スリッパが迫る。首を回してアフロでこれを跳ね返す。

そして、

「これで終わりだ、デイビッド!!」リカルドが叫び、マントを翻した。すると、マントから三十余の家庭用スリッパが煙を出して一斉に射出された。

「うおおおおおおおおお!!」これに対してデイビッドはスリッパを手で投げ、リカルドのスリッパを懸命に撃ち落とす。撃ち落としたリカルドのスリッパ達が次々と爆発する。

リカルドは自分のマントのスリッパにミサイルを仕込んだのだっ

た。

キイイイイイイイイイーン！！空気を裂く斬撃音を喧しく立てて家庭用スリッパが飛ぶ。

「もはやスリッパの意味ねえ！！」そして、二十四のスリッパがデイビッドを直撃した。

凄まじい着弾音が轟いた。

爆風と共に飛んできた衝撃波が枯れ木を揺らし、転がっていたゴキブリを引き裂く。ブロンズの体を吹き飛ばし、地を穿いた。太陽より眩しい閃光が放たれ、ロハネの街が一瞬白に染まった。

土煙と砂煙と硝煙が混じった爆煙が立ち昇る。

しかし、その爆煙がみるみる飛ばされていく。

風？いや、今日は快晴だ。風なんて微塵もない……

まさか、トリカルドが思った瞬間

「ブツイキス！！ブツイキス！！ブウウウツイキス！！！」奇声と共にデイビッドが激しいヘッドバンキングで煙を掻き消しながら現れた。

「何iiiiiiiiiiii！？」リカルドはたじろいだ。

デイビッドはヘッドバンキングで頭を上下に振ることで、ミサイルもといスリッパの衝撃を全ていなしたのだ。

そう、デイビッドはリカルドとほぼ同じ能力を持っているのだ。

第15話 「キ ガイアワーズ」 18

リカルドはデイビッドににじり寄った。

「スリッパ使いの人間はこの世に二人も要らない……」

ならば今ここで殺るのみ……！！

その時、ここで空かし風が吹いた……。

「……帰るわ、俺」それからの暫くの沈黙の後、デイビッドがまた呟いた。「尿路結石が……！！」

「は？」

「痛い！！痛えんだよ！！あああああ！！」叫んで股間を鷲掴みにしてのたうち回りだした。顔がみるみる脂っこい汗で濡れていく。「俺の封印されしチ コがあああああ！！」

「うるせええええ！！この半端厨二野郎がああああ！！」

「畜生、今日のところはこれ位で勘弁しといてやる！！」デイビッドの背後から無数のスリッパが宙に浮いて現れる。そしてそれらのスリッパが彼を中心に巨大な渦を巻く。

「次は殺す！！」そう吐き捨てられたかと思うと、渦が霧散した。デイビッドの姿が消えていた。

第15話 「キ ガイアワーズ」 18 (後書き)

尿路結石

麺が固くて、こっつてりしたラーメンを食べまくったりすると  
ちやう実在の病気。

尿道に石みたいなのが詰まって大激痛が走る。(痛みは陣痛と同  
レベル)



第一次スリッパ大戦が終結してその夜……

ゴキブリの脂で汚れた教会やアリスを掃除するのに半日掛けたので皆かなり疲れていた。

クロアの作った夕食を食べ、一段落。

じゃあ、寝ようか。僕：ブロンズは思った。

ダウトが生欠伸してとぼとぼ歩いてる。見ると、僕の腕時計は十時を指していた。

……まあ、大変だったからなあ……掃除……又メった床をモップでゴシゴシゴシゴシ……

おえつぷ。思い出したら気分悪くなってきちゃった。

とにかく、早く寝よう。

僕は浴室でシャワーを浴びてから、自室に戻った。

パジャマに着替えて、ベッドにダイブ。

……。

寒い。

よく考えてみれば明後日で十二月じゃん。寒いワケだ。

僕はストーブをつけようと一旦ベッドから起き上がった。すると、コンコンとドアをノックする音が聞こえた。

誰だろう……？

僕はストーブをつけてからドアを開けた。するとそこに、猫のぬいぐるみを抱いたパジャマ姿のアリスちゃんが立っていた。本日二回目だ。

「ブロンズさん……」

「……何？」

「私の部屋がまだゴキブリ脂ギッシュなので一晩寝かせて貰えませんか？」

ああ、

そういえばアリスちゃんの部屋ってまだ片づいていないんだっけ。

「うん、いいよ。入って」

「ありがとうございますッ!」

アリスちゃんがジャンプして僕に抱きついてきた。僕はそのまま彼女を抱きかかえ、ベッドで下ろした。

「んじゃ、おやすみ」部屋の明かりを消した。途端、部屋は暗闇に包まれた。唯一の明かりであるナイトテーブルのランプだけがほのかに闇を灯した。

僕はその明かりを頼りにしてソファーに辿り着いた。

ベッドはアリスちゃんに占拠されちゃったし、今日はここで寝ようか……。

ソファに座り、もたれ、目を閉じた。

完全な闇。

おやすみ、アリスちゃん……

だがその時、アロマキャンドルのような甘い香りが僕の鼻を掠めた。

それとついでにこんな声も聞こえてきた。

「ー今晚はアヘンにしましょうか。うふふふふふ。。。

……………。

ぎにゃあああああああああああー！！

僕は急いで部屋の明かりを点け、アリスちゃんの手にあった怪しげなビニール袋を取り上げた。

「あー……っ！！私のアヘンが！！」

「吸わないで！！せめて僕の部屋で吸わないで！！」

「返してくださいよおう……………」

「ダメ、ゼツタイ。」

僕は明かりを消し、ソファに戻り、アリスちゃんから没収した袋をお尻の下に敷いた。

「吸わないでね。約束してよ……………お願い……………」

「わかりました……………」

「んじゃ、おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

目の前で九歳児が狂いゆくのかなんて見たくないよ……………

まあ、もう大丈夫だ。安心して眠れるよ。

僕は再び瞼を閉じた。

第16話 「新教育番組：キ ガイとあそぼ」 5

……。

……。

「ーモルヒネ盛る姫ええ……ぐふふふふふふふふふふふふふふ

……

NOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO!!!

僕は跳ね起きてアリスちゃんの注射機をかつぱらった。

「あーっ！！私のモルヒネがあっ！！」

「確かに吸うなどは言っただけど！！言っただけどもッ！！」

「解りました、飲むタイプならいいんですね」

「MDMAもダメ！！ていうかお薬ダメ！！今日だけは我慢して

！！」

「わかりましたぁ……」

僕は再びソファに戻った。注射機を自分のお尻の下に……いや、刺さったらいけないので注射機はクローゼットの奥にしまった。

一呼吸置く。

んじゃ、寝るか……。



りいりい！！！」

どつちやらコレ、薬の禁断症状らしい！！

「おくすりくださいいいいい！！！！」

「ごめん！！負けたよ！！好きなだけ飲んで吸って打って！！！！」

こうしてブロンズ君は地獄の一晚を過ごしましたとき。

コレを読んでるみんな、危険なお薬はダメ、ゼツタイ。

登場キ ガイ紹介 Mr・J

Mr・J

本命 不詳

年齢 42歳

血液型 A型

好きなもの タバコ

嫌いなもの 人間ドック

クライアントが持つてくる手榴弾などを改造する発破屋を営んでいる。

ガリガリ。容姿はかなりなハードボイルドでキめている。リボンをつけたシルクハットを常時着用。あとサングラス。

極度のヘビースモーカー。一箱分のタバコを一気にふかす。そのため、彼の店はガス密室状態。米国たばこ子連盟の会長を務める。タバコ税が上がると発狂。

生身での戦闘能力はほとんどゼロ。お手製の手榴弾とタバコの煙がエモノ。

戦闘能力

タバコ

体重

読者人気度

作者寵愛度



第17話 「Thanks for ギイ」 1

やあ、昨晚アリスちゃんの手で徹夜したブロンズだよ。おはよう。今日は十一月の第四木曜日、アメリカの祝日「感謝祭の日」。この日はみんながクリスマスに向けて準備を始める日なんだって。

そんな訳で朝から教会は慌ただしい。  
みんなで街に繰り出すんだってさ。

んじゃ、僕も荷造りするか……ん？ちょっと待って。  
外には殺し屋とかがうようよいるんじゃ……

「ああ、その点ならもう大丈夫だよ」クロアは言った。  
なんでも、市長さんが殺し屋たちのアジトに手紙を送りつけたんだって。

…私の財布に手を出した奴らは全員ナパームで焼き殺します？

市長より愛を込めて

さすが市長さん。太っ腹。

という訳で僕たちはちょうどお昼時、街に向かって車（装甲車）を走らせましたとさ。

第17話 「Thanks for キガイ」 2

街でもクリスマス準備が始められていた。街路樹に色とりどりのライトが巻き付けられ、立ち並ぶ店にはクリスマスツリーが飾られていた。

車（装甲車）から降りた僕ら。

雪がぼつりぼつりと降っていた。吐息が白い。もう少しで十二月なんだというのを実感させられる。

「寒い……」

黒いジャンパーにジーンズ、とボーイッシュにキめてきたクロアが僕に寄り添ってきた。

と共にダウトもやってきた。

「やーい、やーい、リア充死ねお！リア充死ねお！」クロアに中指を立てながら脳なし猿みたいに円周する。「ヒュー！ヒュー！ブルンズ！！デキ婚だけはすんなよな！！こいつお前とやる事しか頭ん無えからなア！！」

ここでクロアが反撃に出た。

「Fuck'n pussyyy！！！！うつさい厨二！！殺す事しか頭がないアニヲタキ ガイめ！！」

「なんだア！？ヤんのかテメエ！？コラ！！ええ！？」

「えつ。公衆の面前でヤんの……？アンタそつというのが好きなんだ……アタシも好きだけど」

「……………」

戦意喪失したダウト。

——そつだ、忘れてた。コイツは完全なる変態だ。

第17話 「Thanks for キガイ」 3

「はい、キチガイさん達、終わったかな」リカルドがスリッパを持って地面と水平移動する。もの凄い剣幕の笑顔だ。「終わったよな？終わったよな」

「……はい」

「ハイ、終わったね……じゃあ、糞ビッチ、あとヲタ。指令だ」リカルドはマントの懐から二枚の小さなメモ用紙を取り出した。それらをクロアとダウトそれぞれ一枚ずつ手渡す。「ビッチ、お前はクリスマスツリーを、ヲタ、お前はライトを適当に買ってこい。俺はアフロの新調をする。アーユーオーケイ？」

「は？アーユーオーケイ？イエス」

「んもおおおおお前黙れ！！畜生！！金渡してやるから早くツリー買って来い！！」

「はい」

「その金、ラブホに使うなよ！！」

「……チエツ、ケチ」クロアは舌打ちして中指を立てると、人ごみの中に消えていった。

第17回 「Thanks for キガイ」 4

「つーことでお前早くライト買ってこい、ヲタ」リカルドがダウトに目を移した。

「クソつたため、分かったよ……あつそうだ！テメーこそ俺にブルーレイデッキ買えよ！！観たいアニメが溜まってんだよ！！」

「いい歳こいて何がアニメじゃああああ！！てめえふざけんな！！」

「デッキ買わなかったらライトも買わねえ！！」

「てめえは五才児か！！まあいいだろう、買ってやるから早くライト買え！！」

「話分かるじゃん、んじゃ金」

「ほらよ」リカルドはダウトに素っ気無く百ドル札を手渡した。

「んじゃ、行ってくつぜ。……勘違いすんなよな！！別にお前の為に買ってやる訳じゃねえんだかな！！」

「俺はクーデレ萌えじゃああああああ！！さっさと行け！！」  
そうしてダウトも人混みの中へ紛れていった。

第17回 「Thanks for キガイ」 5

「さてさてブロンズ君。君はかわいいかわいいターキー七面鳥を買ってきなさい」

「えっ？ターキー？七面鳥の事？」ブロンズは聞いた。

「そうだ。今夜のパーティの主役だ。とびきりデカいの買ってこい。これ金な。……おっと。お前、道とか知らねえだろ？つーわけで俺の愛しのアリスた〜ん、ブロンズの道案内頼む」

「は〜い」アフロの中からアリスがひよこっつと出てきた。地面へ降り立つと、ブロンズの元へ駆け寄った。

「んじゃ頼むぜ！二人共！あつ、ブロンズ！俺のアリスたんにも色目使ったら承知しねえからな！？アリスた〜ん、愛してるよ〜！！」ブロンズ班とリカルドは互いに手を振って別れた。

そしてリカルドは新しいアフロを調達しに、ダウトのブルーレイを買ったために、独り、走り始めた。

第17回 「Thanks for キガイ」 6

まずリカルドは理髪店へ向かった。  
アフロを直す為だ。

今の彼のアフロはお椀形をした奇妙で悲惨な形状を成している。  
人前に出るのが恥ずかしいくらいだ。  
赤面しながら全速力で走る。

リアルド達は、街に来る前にあらかじめ「落ち合うのは五時」と  
決めて来た。

今現在の時刻は二時。

つまり、リカルドはあと三時間でアフロを直し、ブルーレイを買  
わなければならない。

大忙しだ。

五分走り続けてようやく店に着いた。

行きつけの理髪店だ。

店の名は「発破屋」。

「ハイ、ボーイ！！何か用かネ〜〜！？」

リカルドが店の入り口で店主の名を叫ぶと、店内からテンション  
超爆なMR・Jが現れた。

「J、いつもので頼む！！手早くな！！」

「アイアイさ〜〜」

次の瞬間、口ハネの街が一瞬閃光と轟音に包まれた。

第17回 「Thanks for キガイ」 7

アフロが完全復活したりカルドはブルーレイを買うため家電量販店へ。

自動ドアをくぐり抜け、店内へ。すると、エアコンやらパソコンやらといった、ありとあらゆる家電が陳列される巨大なマーケットが現れた。

適当なブルーレイデッキを手に、レジへ向かう。

しかし、一つ問題が。

「……なんだこりゃあ？」

リカルドが目当たりにしたのは一本の赤いライン。店の端から端までを一直線に結んであった。そしてそのラインを越えたところすぐに立っているのは警察官。

警察官に尋ねてみると、このラインから一歩でも出たら逮捕する、とのこと。

……カンのいい読者は気がついただろう。

そう。この店、店のだ真ん中に口ハネとワシントンの境界線が敷かれているのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8929r/>

---

CRAZYyyy STUUUUNT!!!!

2011年11月10日01時02分発行